

令和6年度
WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）
コンソーシアム構築支援事業
研究報告書 1年次



令和7年3月

奈良県教育委員会

奈良県立国際高等学校
奈良県立高取国際高等学校
奈良県立法隆寺国際高等学校

令和6年度 WWLコンソーシアム構築支援事業 研究報告書

目次

はじめに

教育長挨拶	1
学校長挨拶	2

1 事業概要

1.1 構想計画書	3
1.2 実施計画書	4
1.3 事業完了報告書	10
1.4 事業結果説明書	11

2 管理機関の取組

2.1 ALネットワーク運営委員会	27
2.2 ALネットワーク担当者会議	28
2.3 高校生国際会議実行委員会	29
2.4 ALネットワーク運営指導委員会	29

3 拠点校・共同実施校の概要

3.1 拠点校の取組概要	30
3.2 共同実施校の概要	
3.2.1 法隆寺国際高等学校	33
3.2.2 高取国際高等学校	34

4 探究の深化

4.1 拠点校の取り組み	
4.1.1 拠点校の教育課程	35
4.1.2 グローバル探究I	36
a 全体計画	
b グローバル探究でのゼミについて	
c トライアル探究の成果と課題	
d スタディツアーへの取り組み	
e 情報年間計画	
4.1.3 グローバル探究II	42
a 全体計画	
b ゼミの取組	
c スタディツアー行程	
d スタディツアーの成果と課題	
4.1.4 グローバル探究III	53
a 全体計画	
b 研究テーマ一覧	
c ゼミの取組の成果と課題	
d 論文作成	
4.1.5 グローバル探究基礎	64
a 中学1年の取り組みの概要	
b 中学2年の取り組みの概要	
c 中学2年プレゼミの成果と課題	
4.1.6 たてにつながる交流会	74
a 1学期実施	
b 2学期実施	

4.1.7	世界の言語	76
	a 世界の言語I	
	b 世界の言語II	
	c 世界の言語III	
	d 異学年交流	
4.1.8	英語	82
	a 概要	
	b EAP I	
	c EAP II	
4.1.9	英語で実施する教科の設置	86
	a イメージョン理数	
	b イメージョン数学	
	c イメージョン環境システム	
4.1.10	学際的な学び	89
	a 中学1年生	
	b 中学2年生	
4.1.11	個人探究週間の取組	94
4.1.12	授業外の学び	95
	a 登美ヶ丘わいわいフェスタ2024	
	b 登美ヶ丘南公民館でのイベント	
	c 秋風のコンサート	
	d with kitchen の取り組み	
	e 家庭クラブによる保育園訪問	
	f GCCの取り組み	
	g 生徒会活動	
	h フードドライブ	
	i ASPnetの活動への参加	
4.1.13	図書館の取り組み	107
4.1.14	成果の発表（生徒）	109
	a WWL高校生フォーラム	
	b 名古屋国際高校 WWL高校生国際会議	
	c WWL滋賀県高校生国際会議	
	d 英語弁論大会など	
	e 韓国語スピーチコンテスト	
	f 中国語スピーチコンテスト	
	g スペイン語スピーチコンテスト、レシテーションコンテスト	
	h フランス語スケッチ・コンクール、暗唱コンクール	
	i 留学生日本語体験発表	
4.1.15	成果の報告（教員）	119
	a 高校3年生グローバル探究公開授業	
	b 中学校グローバル探究基礎公開授業	
4.2	共同実施校の取り組み	121
	4.2.1 法隆寺国際高等学校	
	4.2.2 高取国際高等学校	
4.3	探究プラットフォームの構築	123
4.4	グローバル教育の推進	123
5	アウトバウンドの拡大	
5.1	拠点校スタディツアー	124
5.2	法隆寺国際高校海外研修	127
5.3	高取国際高校海外研修	128
5.4	合同海外研修の企画、実施	129

5.5	海外大学進学促進	
5.5.1	実績	130
5.5.2	海外大学進学者のレポート	131
5.5.3	海外進学セミナー(ISA)	133
5.5.4	海外進学個別カウンセリング	133
5.5.5	笹川平和財団奨学金説明会	134
5.5.6	留学キャラバン隊	135
5.5.7	韓国留学セミナー	136
5.6	海外留学促進	
5.6.1	実績	137
5.6.2	留学者のレポート	138
5.6.3	留学体験発表会	139

6 インバウンドの充実

6.1	外国人生徒の受け入れ促進	
6.1.1	帰国特例措置・選抜実績	140
6.2	留学生の受け入れ促進	
6.2.1	留学生受け入れ実績	140
6.2.2	留学生受け入れ連絡協議会	142
6.2.3	県内留学生日本語体験発表会	143
6.2.4	拠点校での留学生受け入れ	144
	a 国際理解講座	
	b 日本語体験発表会への参加	
6.3	国際交流	
6.3.1	拠点校における国際交流	147
	a 概要	
	b ニュージーランド Lytton高校	
	c ドイツの高校	
	d メキシコ学院 ひまわり学院	
	e 台湾 嘉義高級中学校	
	f サン・テレーズ	
	g 世宗国際高校	
	h 奈良韓国教育院 韓国文化体験	
	i 中学生の交流	
	j 今後の計画	
6.3.2	共同実施校における国際交流	163
	a 法隆寺国際高等学校	
	b 高取国際高等学校	
6.4	高校生国際会議の企画・開催	
6.4.1	高校生国際会議の概要	165
6.4.2	生徒実行委員会	168

7 高度な学びの提供

7.1	高大連携の強化	
7.1.1	大学との連携	170
	a 奈良教育大学	
	b 国際教養大学	
	c 大阪公立大学	
	d 同志社女子大学	
	e 立命館アジア太平洋大学	
	f 奈良先端科学技術大学院大学	

8 成果と課題	
8.1 コンソーシアムの成果と課題	180
8.2 拠点校の取組の成果と課題	181
8.3 共同実施校の成果と課題	183
8.3.1 法隆寺国際高等学校	
8.3.2 高取国際高等学校	
8.4 「グローバル探究」の評価分析について	
学校法人河合塾学校事業推進部 山口大輔氏より寄稿	185
8.5 世界の言語の取り組みの成果	
奈良教育大学 吉村雅仁先生より寄稿	194

令和6年度WWLコンソーシアム構築支援事業研究報告書に寄せて

奈良県教育委員会 教育長 大石 健一

本年度から3年間、県立国際高等学校を拠点校、県立法隆寺国際高等学校、県立高取国際高等学校を共同実施校、さらには、県立奈良高等学校、県立畝傍高等学校、県立青翔高等学校、県立奈良北高等学校、奈良女子大学附属中等教育学校及び名古屋国際高等学校を国内連携校として、文部科学省指定事業のWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（グローバル人材育成強化事業）の委託を受け新たな取組を開始しました。本事業に御尽力いただいております皆様に御礼を申し上げます。

グローバルに活躍できる人材には、語学力のみならず、答えのない課題に対して探究する力や他者と協働して取組力等が不可欠です。本事業では、事業協働機関の御協力のもと、県内外、あるいは国内外の学校が連携し、高校生の幅広い分野への関心や探究する意欲を育み、異なる文化や価値観をもつ者同士が共に学び合う環境を構築することができると考えております。県内の国際高校3校が共同で事業を実施することは、奈良県のグローバル人材の育成を一層推進していくこととなります。

昨年度までも開催していました「高校生国際会議」は、今年度は「高校生国際会議 in NARA」として、海外連携校からも参加していただき、新しい形で12月に開催されました。県内フィールドワークをふまえ、テーマに基づいた議論を活発に行う会議となり、これまでにはない熱のこもった双方向のやり取りが見られる大変有意義な3日間となりました。世界には解決すべき多くの問題がありますが、それに目を背けることなく、世界の高校生が手を取り合い知恵をしぼって明るい未来を築こうとしている姿に頼もしさを感じました。

事業1年目の今年度は、試行錯誤の中で、成果だけでなく課題ややり残したことも多くありますが、次年度以降、学校間の連携や事業協働機関の皆様との連携をさらに強化し、世界で活躍できる人材育成のため、さらに取組を進めてまいりたいと思っております。次年度以降につきましても、皆様の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

奈良から織りなす持続可能な未来

奈良県立国際高等学校長 中尾 雪路

変化がますます激しくなるこれからの時代を生きる子どもたちには、社会の変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を最大限に発揮し、自ら人生を創出することが求められます。このような時代の要請を受け、奈良県教育委員会が平成30年10月に県立高等学校適正化実施計画を策定し、「新たな価値を創造する場」として、県立国際高等学校が令和2年4月に開校いたしました。県立国際高等学校は、「多様な人々と積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する」ことをMissionとしています。

このMissionを実現するため、奈良県立国際高等学校では、生徒たちが6つの力を身に付けることを学校の大きな目標としています。6つの力とは、主に知に関する分野の「探究力」「創造力」、心に関する分野の「協働力」「寛容さ」、行動の部分にあたる「挑戦力」「キャリアデザイン力」です。Missonや6つの力と親和性が高いことから、令和3年度に、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（カリキュラム開発）の拠点校として認定をいただき、3年間、校内のカリキュラム開発や県内外の連携校や関係機関とともにを行う高校生国際会議などの取り組みを進めてまいりました。令和6年度からは、新たにWWLコンソーシアム構築支援事業（グローバル人材育成強化）の拠点校として認定を受け、共同実施校である奈良県立法隆寺国際高等学校、奈良県立高取国際高等学校とともに取り組みを進めているところです。

メインテーマは、「最古の国際都市奈良から織りなす持続可能な未来～ヒトがつながる、学びがつながる、未来につながる～」です。これまでの3年間、前事業では、カリキュラム開発（グローバル探究・世界の言語）や海外の学校との連携構築に取り組み、奈良に新たな学びを創造してまいりました。今後は、新たに加わっていただいた共同実施校や多様なステークホルダーとともに、①カリキュラムの深化（グローバル探究・多言語・学校間など個々の学びを有機的に関連・組織化、ホリスティックな学び）、②アウトバウンド（海外研修、留学、大学進学）や③インバウンド（留学生との学び合い、高校生国際会議）におけるローカルとグローバルの往還、④高大の連携・協働による高度な学びの提供（先取り履修）に取り組むことで、奈良・アジア・世界をつなげ、持続可能な未来を織りなすことができるグローバル人材を最古の国際都市・奈良で育成していく体制を構築していきたいと考えています。これまで紡いできたさまざまな学びの糸、拠点校、共同実施校、連携校のそれぞれのカラフルな糸が、有機的に織り上げられ、「持続可能な未来」という美しい布になることを願っています。

「自分が変われば、世界は変わる」 令和5年度に開催した高校生国際会議で、生徒たちが生み出した提言です。奈良県に学ぶ高校生がこの事業を機につながり、社会の問題をジブンゴトとして捉え、持続可能な社会の担い手として、国内外の生徒たちと協働することができるようなコンソーシアムの構築に、今後も取り組んでまいりたいと考えています。共同実施校、連携校、関係機関のみなさまにおかれましては、引き続きご支援、ご指導を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

期間	ふりがな	ならけんきょういくいいんかい	都道府県名
令和6年度 ～ 令和8年度	管理機関	奈良県教育委員会	ならけん
	ふりがな	ならけんりつこくさいこうとうがっこう	
	事業拠点校	奈良県立国際高等学校	奈良県

令和6年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
グローバル人材育成強化事業 構想計画書（概要）

構想名(30字程度以内)

最古の国際都市・奈良から織りなす持続可能な未来

構想概要(400字以内)＊テーマ設定したグローバルな社会課題について必ず記載すること

令和3年度からWWLコンソーシアム構築支援事業の指定を受け、新設校である拠点校を中心に、カリキュラム開発(グローバル探究・世界の言語)や海外の学校との連携構築に取り組み、奈良に新たな学びを創造することができた。今後は、これまで紡いできたさまざまな糸を有機的に織りあげていく。新たに共同実施校として県内国際高校2校を加え、多様なステークホルダーとともに、①カリキュラムの深化(グローバル探究・多言語・学校間など個々の学びを有機的に関連・組織化、ホリスティックな学び)、②アウトバウンド(海外研修、留学、大学進学)や③インバウンド(留学生との学び合い、高校生国際会議)におけるローカルとグローバルの往還、④高大の連携・協働による高度な学びの提供(先取り履修)に取り組むことで、奈良・アジア・世界をつなげ、持続可能な未来を織りなすことができるグローバル人材を最古の国際都市・奈良で育成していく体制を構築する。

研究開発・実施体制

		機関名・学校名・情報							代表者・校長名			
管理機関		奈良県教育委員会							吉田 育弘			
事業拠点校		奈良県立国際高等学校 (公立)							中尾 雪路			
			学科・コース名	1年	2年	3年	計				学校規模	
		対象:	国際科	114	118	177	409	409			409	
		対象外:					0	0				
事業共同実施校		①	奈良県立法隆寺国際高等学校 (公立)							小橋 康之		
				学科・コース名	1年	2年	3年	計				学校規模
			対象:	普通科	194	199	197	590	935			935
				歴史文化科	40	39	40	119				
				総合英語科	80	78	68	226				
		対象外:					0	0				
		②	奈良県立高取国際高等学校 (公立)							石澤 竜義		
				学科・コース名	1年	2年	3年	計				学校規模
			対象:	普通科	120	118	117	355	651			651
				国際英語科	35	39	16	90				
国際コミュニケーション科	74			77	55	206						
対象外:					0	0						
事業協働機関 (国内外の大学、企業、国際機関等)		①	ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)							田村 哲夫		
		②	JICA関西							木村 出		
		③	日本国際交流振興会(JFIE)							小栗 由香利		
		④	ボルネオ保全トラスト・ジャパン							青木 宗		
		⑤	旭山動物園							坂東 元		
		⑥	一般財団法人PEACE BY PEACE COTTON							葛西 龍也		
		⑦	奈良韓国教育院							権 義周		
		⑧	延世大学(大韓民国)							尹 東燮		
		⑨	公立大学法人国際教養大学							モンテ・カセム		
		⑩	公立大学法人大阪公立大学							辰巳砂 昌弘		
		⑪	同志社女子大学							小崎 眞		
		⑫	立命館アジア太平洋大学							米山 裕		
		⑬	奈良教育大学							宮下 俊也		
		⑭	学校法人河合塾							山口 大輔		
		⑮	株式会社アイエスエイ関西支社							鉤 直樹		
		⑯	株式会社JTB奈良支店							天野 三恵子		
		⑰	サラヤ株式会社							代島 裕世		
事業連携校 (国内外の高等学校等)		①	奈良県立奈良高等学校 (公立)							前田 景子		
		②	奈良県立畝傍高等学校 (公立)							大橋 淳		
		③	奈良県立青翔高等学校 (公立)							出口 千恵美		
		④	奈良県立奈良北高等学校 (公立)							河合 知子		
		⑤	国立大学法人奈良女子大学附属中等教育学校 (国立)							片岡 達郎		
		⑥	名古屋国際高等学校 (私立)							小林 格		
		⑦	嘉義高級中学(台湾) (国立)							陳 元泰		
		⑧	世宗国際高等学校(大韓民国) (公立)							Park Hidong		
		⑨	サン・テレーズ高等学校(フランス) (私立)							Le Vouédec Éric		
		⑩	日本メキシコ学院(メキシコ) (私立)							御所園 忠之		
		⑪	Gymnasium Ernestinum Rinteln (ドイツ) (公立)							Andre Sawada		
		⑫	Lytton high school (ニュージーランド) (公立)							Wiremu John Elliott		

※行数は適宜調整すること

事業計画書

令和6年4月17日

文部科学省初等中等教育局長 殿

（管理機関名） 住 所 奈良県奈良市登大路町 30
名称及び 奈良県教育委員会
代表者名 小谷 隆男

令和6年度「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（グローバル人材育成強化事業）」に関する事業計画書を以下のとおり提出いたします。

記

1. 事業拠点校名

学 校 名：奈良県立国際高等学校
学校長名：中尾 雪路

2. 事業実施期間

委託を受けた日から 令和7年3月31日

3. 構想概要

構想名

最古の国際都市・奈良から織りなす持続可能な未来

概要

令和3年度からWWLコンソーシアム構築支援事業の指定を受け、新設校である拠点校を中心に、カリキュラム開発（グローバル探究・世界の言語）や海外の学校との連携構築に取り組み、奈良に新たな学びを創造することができた。今後は、これまで紡いできたさまざまな糸を有機的に織りあげていく。新たに共同実施校として県内国際高校2校を加え、多様なステークホルダーとともに、①カリキュラムの深化（グローバル探究・多言語・学校間など個々の学びを有機的に関連・組織化、ホリスティックな学び）、②アウトバウンド（海外研修、留学、大学進学）や③インバウンド（留学生との学び合い、高校生国際会議）におけるローカルとグローバルの往還、④高大の連携・協働による高度な学びの提供（先取り履修）に取り組むことで、奈良・アジア・世界をつなげ、持続可能な未来を織りなすことができるグローバル人材を最古の国際都市・奈良で育成していく体制を構築する。（インバウンド型及びアウトバウンド型）

4. 本事業における教育課程の特例の活用 有・無

5. 事業実施体制 (体制図の添付必須)

関係機関・学校に関する情報		代表者
管理機関	奈良県教育委員会	大石 健一
事業拠点校	奈良県立国際高等学校	中尾 雪路
事業共同実施校	① 奈良県立法隆寺国際高等学校	小橋 康之
	② 奈良県立高取国際高等学校	石澤 竜義
事業協働機関 (国内外の大学、企業、国際機関等)	① ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)	田村 哲夫
	② JICA 関西	木村 出
	③ 日本国際交流振興会(JFIE)	小栗 由香利
	④ ボルネオ保全トラスト・ジャパン	青木 宗
	⑤ 旭山動物園	坂東 元
	⑥ 一般財団法人 PEACE BY PEACE COTTON	葛西 龍也
	⑦ 奈良韓国教育院	権 義周
	⑧ 延世大学(大韓民国)	尹 東燮
	⑨ 公立大学法人国際教養大学	モンテ・カセム
	⑩ 公立大学法人大阪公立大学	辰巳砂 昌弘
	⑪ 同志社女子大学	小崎 真
	⑫ 立命館アジア太平洋大学	米山 裕
	⑬ 奈良教育大学	宮下 俊也
	⑭ 学校法人河合塾	山口 大輔
	⑮ 株式会社アイエスエイ関西支社	鉤 直樹
	⑯ 株式会社 JTB 奈良支店	天野 三恵子
	⑰ サラヤ株式会社	代島 裕世
事業連携校 (国内外の高等学校等)	① 奈良県立奈良高等学校	前田 景子
	② 奈良県立畝傍高等学校	大橋 淳
	③ 奈良県立青翔高等学校	出口 千恵美
	④ 奈良県立奈良北高等学校	河合 知子
	⑤ 国立大学法人奈良女子大学附属中等教育学校	片岡 達郎
	⑥ 名古屋国際高等学校	小林 格
	⑦ 嘉義高級中学(台湾)	陳 元泰
	⑧ 世宗国際高等学校(大韓民国)	Park Hidong
	⑨ サン・テレーズ高等学校(フランス)	Le Vouédec Eric
	⑩ 日本メキシコ学院(メキシコ)	御所園 忠之
	⑪ Gymnasium Ernestinum Rinteln (ドイツ)	Andre Sawada
	⑫ Lytton high school (ニュージーランド)	Wiremu John Elliott

事業項目	実施場所	事業担当責任者
(1) AL ネットワークの形成 ①運営委員会の設置、開催 ②担当者会議の開催	高校教育課 等	①②宮岸悠可(管理機関)

(2)探究の深化 ①カリキュラムの深化、特色ある学習活動の実施 ②カリキュラムアドバイザーの配置 ③探究プラットフォームの構築 ④グローバル教育の推進	国際高等学校 法隆寺国際高等学校 高取国際高等学校 高校教育課 等	①中尾雪路（拠点校） 小橋康之（共同実施校） 石澤竜義（共同実施校） ②③④宮岸悠可（管理機関）
(3)アウトバウンドの拡大 ①カリキュラムに位置づけられた海外研修の計画、実施 ②合同海外研修の企画、実施 ③海外大学進学、海外留学の促進	国際高等学校 法隆寺国際高等学校 高取国際高等学校 高校教育課 等	①中尾雪路（拠点校） 小橋康之（共同実施校） 石澤竜義（共同実施校） ②③宮岸悠可（管理機関）
(4)インバウンドの充実 ①外国人生徒、留学生の受け入れ促進 ②高校生国際会議の企画、開催	国際高等学校 法隆寺国際高等学校 高取国際高等学校 高校教育課 等	①中尾雪路（拠点校） 小橋康之（共同実施校） 石澤竜義（共同実施校） ②宮岸悠可（管理機関）
(5)高度な学びの提供 ①高大連携の強化 ②先取り履修に向けた協議	高校教育課 等	①②宮岸悠可（管理機関）
(6)成果検証、評価の実施 ①成果検証委員会の開催 ②運営指導委員会の設置、開催	国際高等学校 法隆寺国際高等学校 高取国際高等学校 高校教育課 等	①中尾雪路（拠点校） 小橋康之（共同実施校） 石澤竜義（共同実施校） ②宮岸悠可（管理機関）

※必要に応じて適宜、行を追加すること。

6. 今年度の計画

(1) 事業項目別実施期間

実施期間：契約締結日～令和7年3月31日												
事業項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
AL ネットワーク運営委員会				○							○	
AL ネットワーク担当者会議	○						○					○
担当者情報共有（オンライン）	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
カリキュラムアドバイザー配置				→	→	→	→	→	→	→	→	→
探究プラットフォーム構築 （公開授業、探究発表会）				○					○		○	
グローバル教育の推進		○		○					○			
海外研修（拠点校・共同実施校）								○				○
合同海外研修企画会議			○				○					○
海外大学進学・留学促進（説明会、報告会等）		○	○	○		○		○	○			
外国人生徒の受入れ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

留学生受入協議会、交流会		○							○			
高校生国際会議									○			
高校生国際会議参加者セミナー					→							
高大連携（高度な学び）					○			○	○		○	
先取り履修協議	→											
成果検証委員会				○		○			○			
運営指導委員会											○	

※必要に応じて適宜、行を追加すること。

(2) 今年度の具体的な事業計画

1. AL ネットワークの形成

①運営委員会の開催

管理機関、拠点校、共同実施校、連携校、事業協働機関、カリキュラムアドバイザーによる運営委員会を年2回（第1回7月、第2回2月）オンライン開催する。

②担当者会議の開催

管理機関、拠点校、共同実施校、連携校の担当者による協議、情報共有を対面またはオンラインで定期開催する。

2. 探究の深化

①カリキュラムの深化、特色ある学習活動の実施

- ・拠点校 … 「グローバル探究」「世界の言語」「英語」の連携強化、ホリスティック（総合的・全人的）な学びの促進（教科横断的な学びの実現）、「イマージョン理数」に加え、「イマージョン数学」「イマージョン環境システム」の設置準備、国際バカロレアディプロマプログラム候補校申請
- ・共同実施校 … ユネスコスクールとしての取組（ユネスコフォーラムの開催等）、「斑鳩学」「あすか学」等の地域と連携した学び探究テーマによるゼミ活動

②カリキュラムアドバイザーの配置

契約日以降、カリキュラムアドバイザーを配置し、月2日程度拠点校または共同実施校においてカリキュラムの推進および発展に関する指導、カリキュラム内容についての指導・助言、教員向けワークショップの運営指導を行う。

③探究プラットフォームの構築

拠点校、共同実施校による公開授業や探究発表会、報告会を開催する。また、探究活動の報告集を作成し、次年度以降の探究活動の参考となるよう拠点校、共同実施校及び連携校で共有する。

④グローバル教育の推進

事業協働機関である JICA 関西等と連携し、県内全体のグローバル化に資するワークショップやフォーラムを開催する。

3. アウトバウンドの拡大

①カリキュラムに位置づけられた海外研修の計画、実施

各校の連携校や姉妹校との交流を含めた海外研修を実施する。

- ・拠点校 … アジスタディツアー（１１月）を開催し、「グローバル探究Ⅱ」の中に位置づけ連携校でのワークショップ、探究テーマに応じたフィールドワークを行う。また、７月以降から連携校との交流、ワークショップを定期開催する。（Zoom または Teams を利用）さらに、現時点では未定だが、「世界の言語Ⅱ」の中に位置づけた短期研修を各言語圏で計画。
- ・共同実施校 … オーストラリア研修とフランス研修を実施する。（３月）また、７月以降、連携校との交流、ワークショップを定期開催する。（Zoom を利用）

②合同海外研修の企画

拠点校、共同実施校、連携校の生徒を対象に、現地でのフィールドワークを含めた探究活動に基づく合同海外研修の実施に向けた企画会議を開催する。（第１回６月、第２回１０月、第３回３月）

③海外大学進学、海外留学の促進

- ・海外留学説明会の開催（５月）
- ・海外大学進学説明会の開催（６月）
- ・留学フェア、留学キャラバン隊の開催（７月）
- ・海外大学進学・留学報告会の開催（１１月）
- ・海外大学個別面談の実施（１２月）
- ・国内トップ大学進学に向けた分析研究（通年）

4. インバウンドの充実

①外国人生徒、留学生の受け入れ促進

各校で積極的に外国人生徒や留学生を受け入れ、外国人生徒・留学生同士の交流、県内高校生との交流を活発にするとともに、受け入れ担当者による連絡協議会を設置し、情報共有や成果報告の場とする。（留学生等受け入れ連絡協議会…５月・１２月、留学生等交流会の開催…１２月）

②高校生国際会議の開催

３日間の開催とし、県内外、海外から高校生、留学生が奈良の地に集まり、対面で英語による議論を深める場とする。奈良県内でのフィールドワークを通じて、持続可能な未来のために大切なことは何かを考える。

４月 担当者会議（高校生国際会議の概要決定）

６月 参加生徒募集

７月 参加生徒決定

８月 参加者セミナー（外国人講師によるワークショップ含む）開始（以降、会議当日まで定期開催）、参加海外連携校とのオンライン交流開始（Zoom または Teams を利用）

※参加テーマに分かれてのセミナー、ワークショップを１２月まで定期開催する。

１２月 ２４～２６日 高校生国際会議

5. 高度な学びの提供

①高大連携の強化

大学での学びを、拠点校、共同実施校、連携校の希望生徒に提供する。

- ・奈良教育大学における夏期集中講座（８月）

- ・国際教養大学におけるイングリッシュビレッジ（未定）
- ・同志社女子大学における体験授業（２月）
- ・大阪公立大学における講義（９月、拠点校）
- ・立命館アジア太平洋大学における研修（11月、拠点校）

②先取り履修に向けた協議

アドバンストプレイスメントシステムの構築に向けて、県内外の大学と協議を進める。

6. 成果検証、評価の実施

①成果検証委員会の開催（学校法人河合塾による成果分析）

拠点校、共同実施校において、アセスメントテスト「学びみらいPASS」を実施し、研究の成果や課題を把握するとともに、自己評価シートにより生徒が自身の伸びを認識する機会とする。
アセスメント実施後、河合塾による教員及び生徒向けの講習会を実施する。（第１回７月、第２回９月、第３回１２月）

②運営指導委員会の設置、開催

運営指導委員会を２月に開催し、専門的な見地から指導・助言、評価を受ける。

7. 財政支援

①探究の深化

拠点校における開発カリキュラムの持続的な実施の観点から、国際教養大学との連携協定による教員向けワークショップ、「世界の言語」におけるネイティブ講師にかかる費用については、県の負担とする。

②インバウンドの充実

高校生国際会議を県のインバウンド事業の一つとして確立させるため、会場使用料や機材使用料、外国人講師等開催にかかる費用については、県の負担とする。

7. 所要経費

（様式第１－１）委託費所要経費積算に記載

（様式第１－２）再委託先所要経費積算に記載

8. 再委託の有無 有・☒無

※再委託を行う場合は、（様式第１－２）再委託先所要経費積算及び（様式第２）再委託承認申請書に記入すること。

9. 担当者

担当課・室	高校教育課	担当者 職・氏名	指導主事・宮岸 悠可
電話番号 (直通)	0742-27-9853	メール アドレス	miyagishi- haruka@office.pref.nara.lg.jp

様式第4（事業完了（廃止）報告書）

事業完了（廃止）報告書

令和7年3月31日

支出負担行為担当官

文部科学省初等中等教育局長 殿

（管理機関名）	住 所	奈良県奈良市登大路 30
	名称及び	奈良県教育委員会
	代表者名	小谷 隆男

令和6年6月4日付け令和6年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（グローバル人材育成強化事業）は、令和7年3月31日に完了（廃止）したので委託契約書第10条の規定により、下記の書類を添えて報告いたします。

記

1. 事業結果説明書（別紙イ）

2. 事業収支決算書（別紙ロ）

様式第4（別紙イ）

事業結果説明書

1. 事業の概要

(1) 事業の実施期間

令和6年6月4日（契約締結日）～ 令和7年3月31日

(2) 事業拠点校名

学校名：奈良県立国際高等学校

(3) 構想の概要

構想名

最古の国際都市・奈良から織りなす持続可能な未来

概 要：

令和3年度からWWLコンソーシアム構築支援事業の指定を受け、新設校である拠点校を中心に、カリキュラム開発（グローバル探究・世界の言語）や海外の学校との連携構築に取り組み、奈良に新たな学びを創造することができた。今後は、これまで紡いできたさまざまな糸を有機的に織りあげていく。新たに共同実施校として県内国際高校2校を加え、多様なステークホルダーとともに、①カリキュラムの深化（グローバル探究・多言語・学校間など個々の学びを有機的に関連・組織化、ホリスティックな学び）、②アウトバウンド（海外研修、留学、大学進学）や③インバウンド（留学生との学び合い、高校生国際会議）におけるローカルとグローバルの往還、④高大の連携・協働による高度な学びの提供（先取り履修）に取り組むことで、奈良・アジア・世界をつなげ、持続可能な未来を織りなすことができるグローバル人材を最古の国際都市・奈良で育成していく体制を構築する。（インバウンド型及びアウトバウンド型）

(4) 本事業における教育課程の特例の活用

☒有・無

2. 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

事業項目	実施期間（令和6年6月4日～令和7年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
AL ネットワーク運営委員会				第1回								第2回
AL ネットワーク担当者会議		第1回	（以降、オンライン、Google Classroomでの打合せ、共有）									
カリキュラムアドバイザー				雇用開始								→
探究プラットフォーム構築				公開授業					公開授業		探究発表会	
グローバル教育の推進						打合せ						
海外研修（拠点校、共同実施校）				共同実施校				拠点校				共同実施校
合同海外研修企画会議				第1回					第2回	第3回		第4回
海外大学進学・留学促進事業				留学セミナー					留学説明会		国費高校生留学促進事業	
外国人生徒受入れ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
留学生との交流									高校生国際会議			
高校生国際会議									高校生国際会議			
高校生国際会議実行委員会、事前研修					第1回実行委員会	第1回事前研修		第2、3回実行委員会、第2回事前研修	第3回事前研修			
高大連携事業（高度な学び）				奈良教育大学サマースクール	奈良教育大学サマースクール						同志社女子大学招待授業	
成果検証委員会			第1回							第2回		
運営指導委員会												委員会

※行は適宜追加して差し支えない

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

a. 管理機関の下、拠点校を中心として組織的に研究開発・実践に取り組む体制の整備状況について

事業の円滑な実施のため、各ステークホルダーは以下の役割を果たした。

- ・奈良県教育委員会事務局高校教育課:AL ネットワーク運営委員会事務局
- ・専任の指導主事:ネットワークの運営
- ・カリキュラムアドバイザー:カリキュラム開発・推進の支援
- ・海外交流コーディネーター:海外連携校との連絡調整
- ・拠点校:ネットワークの中心校、事業の実施
- ・共同実施校:事業の共同実施

- ・連携校：合同事業への参加
- ・事業協働機関：各事業の共同開催や支援 ※詳細は後に記載

なお、連携校の奈良高等学校、青翔高等学校、奈良北高等学校はスーパーサイエンスハイスクール、畝傍高等学校は研究開発学校としての取組をそれぞれ進めている。各事業の特色を生かした各校での探究活動を通して培った視点を生かせるよう、「高校生国際会議」等の行事ではテーマ設定を工夫した。

b. 本事業が円滑および適切になされるよう、管理機関の下、関係機関の間で十分な情報共有体制を整備した状況について

AL ネットワーク運営委員会を立ち上げ、事業の運営方針や事業計画、成果と課題等について、各運営委員が共有する機会とした。

連携校同士がスムーズに情報共有を行えるよう、拠点校、共同実施校、連携校の担当者が参加するAL ネットワーク担当者会議を頻繁に開催した。また、Google Classroom を活用し、「AL ネットワーク担当者 Classroom」を立ち上げ、事業の進捗状況等のリアルタイムな情報共有の場とした。

c. 構想内容の水準を維持し、必要な改善を図るために、管理機関の長、拠点校等の校長が果たした役割について

- (1) 教育長は本事業の実施主体として方針を定め、拠点校や共同実施校、AL ネットワークで行われる事業の円滑な実施のため、主体性をもって以下の役割を果たした。

ア AL ネットワークの運営

AL ネットワーク運営委員会の長として、運営委員会を組織し協議会を開催することを通して、本事業の方針を決定し、事業の進捗を管理するとともに、コンソーシアムを通じて関係各所の役割を明確にし、積極的な協力を要請し、本事業の効果的な実施を図る。

イ 運営指導委員会、検証委員会の開催

運営指導委員会、検証委員会を組織し開催した。

ウ 人的支援

人的支援が円滑に実施できるよう、教育長は、高校教育課に、事業専属の指導主事を配置した。また、カリキュラムアドバイザーを前事業から継続して派遣した。さらに、外国人講師、事務補助員を雇用し、拠点校に派遣した。留学生の円滑な受け入れのために、拠点校には学習支援員を、共同実施校には教員を加配した。

エ 財政的支援

財政的支援が円滑に実施できるよう、教育長は、高校教育課を指導した。高校教育課は予算等の執行について、拠点校等と連携し、執行の状況、使途等について、直接指導・助言を行った。

- (2) 拠点校の校長の役割

拠点校の校長は、以下の役割を果たした。

ア 校内体制の整備

組織的に研究開発・実践に取り組み、学校全体の授業改善や教職員の意識改革を促すことができるよう、校内分掌として、ESD 部を配置している。部内に WWL 事業専属担当、ユネスコスクール担当、留学生担当、英語教育担当、グローバル探究担当、世界の言語担当、国際交流担当、ICT 担当などを置き、事業が円滑に実施できる組織体制を確立した。なお、拠点校の ESD 部は令和 6 年度文部科学大臣優秀教職員表彰（組織の部）を受賞した。

イ 事業の進捗管理

事業が予定通り進捗しているか、校内体制が円滑に運営できているかを絶えず確認した。

ウ 関係各所との連絡・調整

管理機関である県教育委員会と絶えず連絡をとり、調整につとめた。

d. 本事業の実施に際し、専門的見地から指導・助言に当たる運営指導委員会の開催実績や事業の実施状況を検証するための組織（検証組織）等が検証するために収集した資料等の状況について

運営指導委員会

令和 7 年 3 月 6 日に開催予定である。

検証委員会

事業協働機関である学校法人河合塾の協力により、事業成果の検証を行うため、本年度より検証委員会を開催した。

6 月 12 日 内容：学びみらい PASS を活用した検証方法について

1 月 8 日 内容：拠点校の育成指標と学びみらい PASS のクロス分析、探究の評価方法

3 月開催予定 内容：本年度の分析結果について

e. 管理機関が、拠点校等の卒業生の卒業後の進路とイノベティブなグローバル人材としての成長の過程を追跡把握する仕組みを構築し、必要な情報を収集する状況について

拠点校では、本年度海外大学へ進学した卒業生数名に対して、現在の状況などについて聞き取り調査を実施した。結果は、WWL 報告書に掲載した。

県教育委員会が、拠点校の卒業生に次年度実施する予定のアンケート調査について、内容を検討した。

f. 外国人生徒の日本での学習や生活を支援する体制について

本年度は県内全域で 36 名の留学生を受け入れた。留学生の日本語能力は様々であることから、受入れ後も、学校が個々の能力・適性に応じた学習カリキュラムを作成する。拠点校には、外国人生徒のメンタル面でのサポートや日本語指導のため、学習指導員を配置した。共同実施校 2 校には、外国人生徒のサポートのため、教員をそれぞれ 1 名加配した。留学生の受け入れがスムーズに進むよう、各校の留学生担当者が留学生受け入れ機 (AFS, YFU, JFIE) の担当者と密に連携をしている。

また、奈良県高等学校国際教育研究協議会主催、県教育委員会後援で、留学生の日本語による体験発表会を開催した。

g. 事業拠点校での取組について、本事業による取組が学校全体の授業改善や関係機関の教職員や生徒の意識改革を促した状況について

拠点校では、「グローバル探究」をすべての教員が担当している。教科横断型で生徒の探究活動に関わる中で、従来の知識偏重型の授業から、探究を重視した授業への転換が進んでいる。また、高校2年生全員が「グローバル探究」の授業の一環として、韓国へのスタディツアーを行ったことから、生徒の視野がより広がった。

h. 国が実施しているアジア高校生架け橋プロジェクト+（プラス）の留学生を受け入れた場合（予定含む）、国名や人数等

i. 高大連携、海外大学との連携や外国人生徒の受入を推進するため、セメスター制を事業完了までに行うことについて

拠点校では、海外大学進学や、外国人生徒の受け入れを促進するため、国際バカロレアディプロマプログラムの導入を目指しており、令和6年5月に候補校となった。開始を予定している令和8年度から前後期制を取り入れる予定としている。

【財政等支援】

**a. 管理機関が、本事業の運営にかかる経費を国からの委託経費のみではなく、自己負担額として、計画段階よりさらに計上したもの
該当なし**

b. 管理機関が、事業の実施に必要な取組に対し、人的又は財政的な支援や教職員を育成するための研修やセミナー等を実施した状況について

(1) 人的支援

外国人生徒の支援のため、拠点校には学習指導員を、共同実施校には教員を加配している。
カリキュラム開発のため、指導主事等を拠点校および共同実施校に適宜派遣する。

(2) 財政的な支援

高校生国際会議にかかる費用について必要な財政支援を行った。
国際バカロレアプログラムの導入に向けて、計画的・長期的に人的(加配措置)または財政的な支援(認定にかかる費用、環境整備、教材費等)を行っている。

(3) 研修やセミナー等の実施

7月、12月に実施した拠点校における公開授業、及び2月に実施した県全体での探究発表会において、参加教員による協議会、交流会を開催した。
また、12月に開催した「高校生国際会議 in NARA」では、参加校の引率教員による情報交換会、共有会を実施した。

c. 管理機関が、国の委託が終了した後も事業を継続的に実施するために計画したこと

(1) 管理機関

今年度新たに開催した「高校生国際会議 in NARA」は、県のインバウンド事業の一つとして確立させるため、開催にかかる費用については、県での財政支援を次年度以降も継続して行う予定である。

また、本事業で構築している学校間の連携や研究成果の共有等のプラットフォームについて、事業終了後も継続し、活発な交流が進むよう検討している。

(2) 拠点校および共同実施校

県内の国際高校3校での連携を強めるため、校長間、担当者間で、定期的に打ち合わせを行なった。大学訪問などの拠点校で実施している事業への共同実施校の参加を積極的に呼びかけた。

【ALネットワークの形成】

a. 構想目的・年度計画の策定、事業の運営、達成状況の評価・見直しのため、管理機関の長と拠点校等における本事業の運営責任者、主要な協働機関の関係者等をメンバーとするALネットワーク運営組織の実績について

管理機関、拠点校、連携校及び協働機関が同じ方向に向かい事業の目標を達成できるよう、第1回ALネットワーク運営委員会を7月に開催し、事業運営の方向性について確認した。拠点校、共同実施校及び連携校から学校長が出席し、協働機関からは各機関の代表が出席した。連携校学校長からは同事業への協力を約束し、協働機関からは、それぞれが得意とする分野での連携や協力を確認した。

第2回ALネットワーク運営委員会を3月に開催予定である。

b. ALネットワーク運営組織により、本事業が円滑及び適切になされるよう、関係機関の間で十分な情報共有体制を整備し、新たな協働事業の開発、有効な事業実施を実現したことについて
関係校が十分に情報を共有しながら事業を進めていけるよう、各校の担当者会議を5月に開催し、以降はGoogle Classroomを活用した情報共有や発信を行った。

3日間の日程で開催した「高校生国際会議 in NARA」は、拠点校、共同実施校による運営とし、該当3校が連携しながら、実行委員会、事前研修、会議運営を行った。

事業協働機関とは、関係校に提供できる学びの機会について検討し、各校での積極的な活用を奨励した。

c. ALネットワーク運営組織が、国内外の大学、産業界、その他国際機関等との連携・交流を通じて、当該プログラムの修了生の、国際的な分野を学ぶ国内外の大学への進学や国内外のトップ大学等への進学、海外留学、外国人生徒受入等の促進に寄与したこと

ア 修了生の国内外のトップ大学への進学を促進するための事業

- ・柳井財団奨学金説明会 7月（連携校での開催）
- ・「留学キャラバン隊 in 奈良」7月

- ・ 笹川財団奨学金説明会 7月
- ・ 奈良韓国教育院との連携による韓国留学セミナー県内生徒保護者約 20 名参加 12 月

イ 海外留学を促進するための事業

- ・ 拠点校に海外交流コーディネーターを配置
- ・ 海外留学説明会 5月 拠点校

ウ 外国人生徒受け入れ等の促進に向けた事業

- ・ 県立高等学校入学者選抜帰国生徒等特例措置の実施
- ・ AFS や YFU との連携による外国人生徒の受け入れ

d. AL ネットワーク運営組織に専任者からなる事務局を設置した状況とともに、本事業のカリキュラムを開発する体制を整えることについて

高校教育課に配属された専属の指導主事が中心となって、AL ネットワークの連絡・調整にあたりながら、主としてカリキュラム開発の指導を行っている。また、カリキュラムアドバイザーとして、協定締結大学である大阪公立大学の吉田敦彦教授に、カリキュラム開発・推進の支援及び指導助言にあたっている。

e. AL ネットワーク運営組織において、国内外の大学、企業、国際機関等と協働し、国内外の高等学校等との連携によるテーマに関連した高校生国際会議等の開催準備状況（令和元年度から令和5年度までのWWLコンソーシアム構築支援事業カリキュラム開発拠点校は開催状況）について

ア「高校生国際会議 in NARA」の開催

日時 : 令和6年12月24日、25日、26日

参加校 : 拠点校、共同実施校、連携校（国内外）、県内留学生 計43名

内容 : 第1日 開会式、学校紹介ワーク、ディスカッション①（課題の共有）

第2日 フィールドワーク（県内3カ所）、ディスカッション②（フィールドワーク振り返り）、ディスカッション③（学んだこと、課題の解決）

第3日 ディスカッション④（共有準備）、全体共有会、閉会式

イ 合同海外研修の実施

AL ネットワークの生徒が、学校の枠を超えて、合同で海外へ出向き学びを深める機会を令和8年度に実施するための企画・調整を実施した。

f. 事業成果の社会普及のため、社会に開かれたフォーラムや成果報告会などの実施（あるいは計画）について

次年度以降に、国際理解に関するフォーラムの開催や、事業の成果報告会を広く公開して実施することを今後検討予定である。

g. AL ネットワーク運営組織が、構想目的の達成に資する取組を計画し、その効果的かつ円滑な運営のための情報収集・提供を行ったことについて

(1) カリキュラムの深化

- ・複言語教育の充実を目指し、本年7月に国際学会で担当教員が発表を行った。
- ・グローバル探究での取り組みについて、本年7月に日本学校教育学会で発表を行った。
- ・拠点校教員10名が4月・8月に国際バカロレアプログラムのワークショップに参加した。

(2) アウトバウンドの拡大

- ・拠点校アジアスタディツアーでは、同じ研究テーマをもつ日韓の生徒が事前にオンラインで探究を進める交流を行った。

(3) インバウンドの充実

- ・拠点校や共同実施校では、アジア高校生架け橋プロジェクト+やその他合計38名の留学生をこの3年間で受け入れている。「高校生国際会議 in NARA」に留学生も参加対象とし、留学生同士の交流や日本人生徒との交流を進めた。それにともない、留学生幹旋団体との連携も強化され、多くの情報共有を行った。「高校生国際会議 in NARA」に参加した海外連携校とは、オンラインでの事前交流も行い、担当教員、引率教員同士の連携も深めた。

(4) 高度な学びの提供

- ・「奈良教育大学サマースクール」を開催し、複言語教育やデータ分析など大学ならではの高度で深い学びを関係校の生徒を対象に実施した。

h. ALネットワーク運営組織の基盤となる関係機関との協定文書等

「公立大学法人国際教養大学、奈良県立国際高等学校及び奈良県教育委員会の教育連携に関する協定」

「大阪府立大学、奈良県立国際高等学校及び奈良県教育委員会の教育連携に関する協定」

「同志社女子大学及び奈良県立国際高等学校の教育連携に関する協定」

3. 研究開発の実績

(1) 実施日程

事業項目	実施期間（令和6年6月4日 ～ 令和7年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
探究活動の推進			カリキュラムアドバイザー配置（～3月、拠点校）	公開授業（拠点校）				アジアスタディツアー（拠点校）	ユネスコフォーラム（共同実施校） 「高校生国際会議 in NARA」		探究発表会	
アウトバウンド事業				オーストラリア研修（共同実施校） 合同海外研修企画会議①				アジアスタディツアー（拠点校）	合同海外研修企画会議②	合同海外研修企画会議③		オーストラリア姉妹校研修（共同実施校） 合同海外研修企画会議④
インバウンド事業	留学生受入（通年）		メキシコ連携校受入（拠点校） アメリカ姉妹校受入（共同実施校）				フランス連携校受入（拠点校） ドイツ姉妹校受入（共同実施校）	台湾連携校受入（拠点校）	「高校生国際会議 in NARA」			

			校)									
高度な学び（高大連携）				奈良教育大学サマースクール	奈良教育大学サマースクール			立命館アジア太平洋大学研修（拠点校）	国際教養大学出張講座（拠点校）	大阪公立大学招待授業（拠点校）	同志社女子大学招待授業	

※行は適宜追加して差し支えない

(2)実績の説明

【研究開発・実践】

a. 海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修等を、カリキュラムの中に体系的に位置づけて実施したことについて

ア 拠点校でのアジアスタディツアー

拠点校では、本年度開校後初となる2年生全員参加の海外研修「アジアスタディツアー」を実施した。このツアーは学校設定科目「グローバル探究」（後述）の一環として実施されるもので、事業協働機関でもある株式会社 JTB 奈良支店と協働しながらプログラム開発を行った。プログラムの中心は協定締結校である世宗国際高等学校との英語による共同探究活動としている。現地での英語による協議をより効果的に進めるため、両校生徒をそれぞれの探究テーマに基づいて事前にマッチングし、生徒同士の事前のオンラインによる探究テーマに関わる交流を2回実施した。また3日目には、「グローバル探究」の3つのゼミに分かれて、それぞれのテーマごとに、探究活動を行った。

イ 拠点校での短期海外研修や長期留学

拠点校では、学校設定科目「世界の言語 II」（後述）では、5つの言語を学び、連携校であるサン・テレーズ高校(フランス)、日本メキシコ学院（メキシコ）、嘉義高級中学(台湾)などから生徒が拠点校を訪れ、対面での交流を行うことができている。現在、これらの学校における短期研修を実施するために、各連携校と協議を進めている。

ウ 共同実施校におけるカリキュラムに位置付けられた海外研修

共同実施校においては、高取国際高等学校で「フランス語」に位置付けられたフランス研修（今年度は開催なし）を、法隆寺国際高等学校で、「ディベート・ディスカッション」に位置付けられたオーストラリア研修をそれぞれ実施している。

エ 連携校におけるカリキュラムに位置付けられた海外研修

連携校である名古屋国際高等学校では、海外研修の際に、オンラインで現地と奈良県立国際高等学校(拠点校)の生徒をつないで交流するなどの取組を行なっている。その他の連携校においても、スーパーサイエンスハイスクールである青翔高等学校ではタイへ、奈良高等学校では、シンガポールへ、奈良女子大学附属中等教育学校では、ベトナム、韓国など、それぞれカリキュラムに位置付けた海外研修を実施している。

オ テーマに基づいた AL ネットワーク連携校合同での海外研修

令和 8 年度にテーマに基づいた連携校合同での海外研修を実施するため、事業協働機関である株式会社アイエスエイ、ボルネオトラストジャパンと打ち合わせを行った。現在、ボルネオ島でのスタディツアーの実現に向け、企画・調整を行なっている。

b. 国が実施するアジア高校生架け橋プロジェクト+（プラス）や海外の連携校等からリーダー、架け橋となる外国人生徒を受け入れ、日本人生徒と外国人生徒と一緒に英語等での授業を履修するための学校体制を整備したことについて

ア 外国人生徒の受け入れ及び体制の整備

(1) 入学者選抜帰国生徒等特例措置等の検討(県教育委員会)

令和 8 年度入試に向けて、選抜実施時期、選抜内容、対象者などの検討を行った。

(2) 留学生受け入れ連絡協議会の設置(県教育委員会)

令和 7 年度開催に向けて、各校の留学生受け入れ団体、各校の留学生担当との情報共有を行い、現状や成果と課題を協議した。

(3) 県内留学生交流会の開催(奈良県国際教育研究協議会主催)

令和 6 年 12 月 14 日 県内留学生日本語体験発表会を開催

(4) 英語で学ぶことができる授業の拡大(拠点校)

令和 7 年度からの開講に向けた準備(後述)

c. 設定したテーマ（SDGs，経済，政治，教育，芸術等）について

最古の国際都市・奈良の次代を担う高校生が、世界の国々の若者とながり、アジア、世界へと視野を広げながらも、奈良の伝承文化や足元の課題に目を向け、持続可能な社会の実現に向けて、この地で「何を残し、何をやめ、何を新たに創るか」について問い続けることを設定テーマとしており、令和 6 年 12 月に開催した高校生国際会議では、奈良で持続可能な社会の実現に向けて取り組みを進めている方のワークショップを開催し、台湾や京都、名古屋の高校生とともに、持続可能な社会の実現に向けて協議を行なった。

d. イノベーティブなグローバル人材育成に資する体系的かつ先進的なカリキュラム研究開発を、国内外の大学，企業，国際機関等との協働により行ったことについて

機関名	協働内容	期日
ボルネオ保全トラスト・ジャパン	合同スタディツアーの企画	通年
奈良韓国教育院	飛鳥の風 韓国留学セミナー 韓国大学進学支援	7 月 12 月 通年
株式会社 JTB 奈良支店	アジアスタディツアーの企画	4 月～11 月

株式会社アイエスエイ	グローバルセミナー 海外大学進学支援	5月 7月 1 2月
延世大学	大学で講義に参加	1 0月
JFIE、AFS、YFU	留学生受け入れ	通年
奈良教育大学	夏期集中講座	7月、8月
国際教養大学	出前講座	1 2月
大阪公立大学	大学講義に参加	1月
同志社女子大学	大学講義に参加	2月
立命館アジア太平洋大学	異文化理解研修	1 1月
奈良先端科学技術大学院大学	留学生と交流 国際会議の補助	8月～1 2月 1月
学校法人河合塾	成果検証	6月 1月

e. 設定したテーマと関連し、外国語や文理両方の複数の教科を融合した内容を、外国語を用いながら探究活動を行う「グローバル探究」等の教科・科目を設定した状況について、また、その実施にあたって外国人講師やICT等を活用した実績について

(1) グローバル探究

- ・グローバル探究 I(1年次3単位必修) プログラミングなども学習。
- ・グローバル探究 II(2年次3単位必修)
- ・グローバル探究 III(3年次3単位必修) 論文作成、英語はネイティブ教員が指導。

(2) 世界の言語

- ・世界の言語 I(1年次2単位必修) 全員が5言語と日本手話(2時間)を学ぶ。(日本初の取組) 複数の言語間の共通点や相違点について考察したり、それぞれがもつ文化の比較をしたりする講座を本年度新たに設定した。
- ・世界の言語 II(2年次2単位 必修) ネイティブ教員とのチームティーチング 中学生への学びの共有を今年度はじめて実施した。
- ・世界の言語 III(3年次2単位 選択) ネイティブ教員とのチームティーチング

(3) カリキュラムの有機的な結びつき

- ・アジアスタディツアーにおける「グローバル探究」と「世界の言語」の結びつき
- ・論文作成における「グローバル探究」と専門教科「英語」との連携
- ・「グローバル探究基礎」におけるカリキュラム開発

(4) IDU(学際的な単位)の実施

- ・中学校の国際バカロレアミドルイヤーズプログラム(MYP)の中で各学年が1回実施。
- ・今後、高校のカリキュラムにつなげていくため、発表会の様子を高校教員が参観。

(5) 学校間のカリキュラム共同開発(「グローバル探究」と「斑鳩学」「あすか学」)

- ・令和10年度の完成を目標に、3校共同でのカリキュラム開発に向けて検討を行った。

(6) 英語等で履修できる科目の設置

- ・「イメージン理数」本年度実施

- ・「イマージョン数学」（令和 7 年度より設置予定で、現在高校 2 年生で試行実施）
 - ・「イマージョン環境システム（令和 7 年度より設置予定で、今年度カリキュラムを作成）」
- ※ 拠点校では、令和 6 年 5 月に国際バカロレアディプロマプログラムの令和 6 年 5 月に候補校となり、令和 8 年度の認定を目指して準備を進めている。なお、令和 6 年 12 月に国際バカロレアミドルイヤーズプログラムの認定校となった。

f. 体系的なカリキュラムの編成にあたって、文系・理系を問わず、各教科をバランスよく学ぶ教育課程の編成をしたことについて

- ・拠点校では国際科単独設置校であり、1 年次から 3 年次まで、文系・理系のクラス分けのない教育課程を編成している。本年度は令和 8 年度からの導入を目指している国際バカロレアディプロマプログラムに向けて、教育課程の準備を進めた。
- ・共同実施校においても、それぞれ地元地域や郷土奈良についての学びを特色とし、生徒の興味・関心に応じて科目を柔軟に選択できるよう、編成を工夫している。

g. 学習活動が、構想目的の達成に資するよう工夫したことについて

- ・拠点校における個人探究週間の取組
拠点校では、定期考査を撤廃し、「個人探究週間」を年 5 回設定している。期間中の午前には「たてにつながる探究交流会」を実施し、異学年での探究の交流活動を大切にしている。午後は 1 人 1 人の探究を深められる時間としている。
- ・共同実施校では、法隆寺国際高等学校ではユネスコフォーラムの開催、高取国際高等学校ではテーマによるゼミ活動や大学教員による指導等を通して、探究活動の支援や、発表・共有の機会を豊富に設定する工夫をしている。

h. 高大連携による大学教育の先取り履修を可能とする取組の計画（令和元年度から令和 5 年度までの WWL コンソーシアム構築支援事業カリキュラム開発拠点校は実施状況）について

ア 奈良教育大学における夏期集中講座の開催（「奈良教育大学サマースクール」）

日時： 令和 6 年 7 月 25 日、7 月 29 日、8 月 1 日、8 月 5 日

テーマ：「多言語、国際理解」「データサイエンス」

受講した生徒に対しては、大学から「修了認定証」が渡された。

本年度の試行実施を分析し、今後 奈良教育大学と受講した単位認定の実現に向けて協議を進める。

イ 先取り履修に向けた協議の進捗状況

今年度奈良教育大学で開催したサマースクールを、次年度以降より広いテーマで多くの生徒が受講できるようにすることをきっかけに、先取り履修について協議を始める予定である。その他の連携大学ともすでに協議をはじめており、3 年間で県内 3 大学、5 年間で県内 3 大学に加え、近畿圏 3 大学での実施を目指す。

i. より高度な内容を学びたい高校生が学習できる環境を整備したことについて

同志社女子大学での講座を令和7年2月25日に拠点校が実施し、共同実施校からも4名の参加があった。

これまで拠点校で実施していた大学での学びの機会を共同実施校にも広げ、一緒に参加できる体制をとった。

j. 「拠点校」や「共同実施校」だけでなく、「連携校」においても海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修等を、カリキュラムの中に体系的に位置づけていることについて

スーパーサイエンスハイスクールとしても取り組んでいる青翔高等学校及び奈良北高等学校は、タイでの研修プログラムを通してさらなる探究マインドを醸成し、また、奈良高等学校では、連携校があるシンガポールへの海外研修を実施し、相互交流を学校の特色としている。

k. 「拠点校」や「共同実施校」だけでなく、「連携校」においても国が実施するアジア高校生架け橋＋（プラス）や海外の連携校等からリーダー、架け橋となる外国人生徒を受け入れ、日本人生徒と外国人生徒と一緒に英語での授業等を履修するための学校体制について

連携校である奈良高校では、連携するカソリックジュニアカレッジ（シンガポール）から生徒を毎年受け入れ、地元の小学校を交えた交流のほか、高校での授業参加、探究成果発表会を実施しており、毎年相互に受け入れる体制が確立されている。

l. これまで先進的な課題研究等の実績があり、その分析評価が行われ、それらの結果を踏まえた研究開発計画及びその成果について記載すること。

拠点校では、昨年度までの事業において、「グローバル探究」のカリキュラム開発を行ってきた。カリキュラムアドバイザーの指導助言のもと、3年間を通じた探究活動において、成果だけではなく、その過程をより重視するプロセスを確立した。さらに、事業協働機関の協力のもと、探究の評価方法について、また生徒がどのような力を伸ばしたかを分析してきた。本年度からは、開発したカリキュラムのもと、これまで以上にグローバルな探究活動が行えるよう、「グローバル探究」と「世界の言語」の連携をはじめとする科目間連携を意識した取組を行った。

m. オンラインを駆使し、国内外の大学等と連携したAIやビッグデータなど文理横断的な行動な学びを実現するカリキュラム開発について

次年度、奈良教育大学をはじめとする県内の大学教員による様々な学問分野の講義が行われる「学問祭」に高校生も参加させていただくことを検討している。対面だけでなくオンラインでの参加も可能になる予定であり、高校での学びにかかわらず、学問の奥深さを知る機会となると考えている。

n. 大学教育（国内大学）の先取り履修の単位認定について

今年度、7～8月に「奈良教育大学サマースクール」として、大学での高度で深い学びを一定期間得られる機会を新たに創設した。奈良教育大学での先取り履修、単位認定について検討、協議をしている。

o. 海外大学との先取り履修を可能とする取組について

4. 目標の進捗状況、成果、評価

a. イノベティブなグローバル人材の育成状況について

本事業では、「グローバル人材に必要な力」を、探究力、創造力、協働力、寛容さ、挑戦力、キャリアデザイン力)の6つの力としている。これらは県が拠点校開校前に作成したグラデュエーションポリシーである。拠点校においては、6つの力のループリックを作成し、グローバル探究の時間ごとに振り返りを行うとともに、年に数回学校教育活動すべてにおいて、これらの力が育成できているかを自己評価している。また、4月に河合塾の「学びみらいPASS」を全校生徒が受検し、成果の検証を行なっている。(3月末までに分析結果を追記予定)

b. ALネットワークが果たした役割等について

これまで各校単独で実施していた取組が、県内での共有、共同実施へと広がり、さらに県外や故国外へも広げることができた。生徒にとっては、いまや他校、他県、海外の生徒と協働することが当然のように自然にできるようになっている。また、教員同士のつながりという点においても、ネットワークの価値は大きく、行事開催にあたり、担当教員同士が情報交換や交流にとどまらず、各校での取組実践例の紹介といった、今後の自校での取組の発展につながるような機会を得た。

c. 短期的、中期的及び長期的に設定した目標(要件1-①、②の重点的に取り組む項目の目標を含む)の進捗状況等について

ア カリキュラムの深化

拠点校における ・探究の高度化 ・複言語教育の推進 ・ホリスティックな学びの推進(前述)

イ アウトバウンドの拡大

- ・拠点校におけるアジアスタディツアーの実施(R6)
- ・合同海外研修の実施に向けた計画(R6 企画会議)
- ・長期留学生県内5名 ・海外大学進学県内6名(R6.3 卒業生)

ウ インバウンドの充実

- ・高校生国際会議の開催
- ・拠点校における英語で学ぶ科目を3科目にするための準備
- ・県内外国人生徒・留学生を20名に(R6 36名)

エ 高度な学びの提供

- ・県内3大学での先取り履修実施(実施協議中)
- ・拠点校での国際バカロレアプログラムミドルイヤーズプログラム認定

オ AL ネットワーク

- ・ネットワーク組織体制の確立（R6 構築途上）

5. 次年度以降の課題及び改善点

ア 本事業に関する管理機関の課題や改善点について

各校で行っている日頃の探究活動を活性化することを目的とした、探究プラットフォームの構築をさらに進めることが課題である。教員への負担をかけずに各校での取組を手軽に共有できるシステムを構築したい。

また、先取り履修、単位認定に向けた大学との協議を前に進めるにあたり、多くのハードルがあるのが現状である。本来の目的である、生徒の関心を広げ、学びたいことを追究できる学びの場を設定することを原点に、次年度は大学での学びの魅力を発信していきたい。

イ AL ネットワークの課題や改善点について

留学生受け入れに関して県での連絡協議会を開催することが次年度以降となった。受け入れ団体にも参加していただくことを検討していたが、留学生により受け入れ団体が異なり、各受け入れ団体ごとに受け入れや来日後の生活に関する方針も異なるため、まずは各校の担当教員のみでの連絡会を開催することを検討する。より効果的で、教員の負担にならない開催方法を考えたい。

ウ 研究開発にかかる課題や改善点について記載すること。

本事業の重点項目である、アウトバウンド事業については、参加生徒の家庭の負担や引率教員の旅費確保といった大きな壁があり、学校の熱意や努力だけでは開催できない現状である。県での予算確保が必要となってくるが、その実現は容易ではなく、課題として依然残っている。他の自治体の取組も参考にしながら解決への糸口を探りたい。

また、インバウンド事業については、年々、海外からの短期、長期での受け入れが各校で進んでおり、校内でホストファミリーを募集して滞在期間中受け入れるケースが増えている。生活を共にしながら生徒同士の貴重な交流の場ではあるが、無償での受け入れの場合も多く、ホストファミリーの確保に苦慮している。該当校だけでなく、事業連携校で共同で受け入れ先を募るなど、工夫が必要である感じている。

エ 自走に向けた取組（予算確保や人員配置等）と自走の方向性について

事業終了後も、本事業で構築したネットワークが持続して協働した学びが継続するよう、管理機関及び関係校が相互に連携を強化していく。

カリキュラム開発事業の段階から開催している高校生国際会議については、事業にかかわらず県での行事として継続していくための予算措置を講ずる予定である。また、そのスムーズな運営に資するため、担当指導主事を置く予定である。また、留学生の受け入れに関わる学習支援員等のサポート人材の配置については、県で継続できるようにする。

【管理機関の担当者】 本件について連絡する場合がございます。

担当課・室	高校教育課	担当者 職・氏名	指導主事・宮岸 悠可
電話番号 (直通)	0742-27-9853	E-mail	miyagishi- haruka@office.pref.nara.lg.jp

2. 管理機関の取組

2.1 ALネットワーク運営委員会

氏 名	所 属 等
木村 出	独立行政法人 JICA関西
内田 浩樹	公立大学法人国際教養大学
鉤 直樹	株式会社アイエスエイ 関西支社
山口 大輔	学校法人河合塾 学校事業推進部
中尾 雪路	奈良県立国際高等学校長（拠点校）
小橋 康之	奈良県立法隆寺国際高等学校長（共同実施校）
石澤 竜義	奈良県立高取国際高等学校長（共同実施校）
前田 景子	奈良県立奈良高等学校長
大橋 淳	奈良県立畝傍高等学校長
出口 千恵美	奈良県立青翔高等学校長
河合 知子	奈良県立奈良北高等学校長
片岡 達郎	国立大学法人奈良女子大学附属中等教育学校長
小林 格	名古屋商科大学系列校名古屋国際高等学校長
大石 健一	奈良県教育委員会 教育長

(1) 第1回運営委員会

日時：令和6年7月16日（火）

場所：オンラインによる開催

内容：ALネットワーク運営委員の委嘱について

WWLコンソーシアム構築支援事業（グローバル人材育成強化事業）について
今年度の事業計画について

(2) 第2回運営委員会

日時：令和7年3月7日（金）

場所：オンラインによる開催

内容：令和6年度の取組について

運営指導委員会での指導助言について

次年度の取組について

2.2 ALネットワーク担当者会議

氏 名	所 属
松本 真紀、浅井 悠志、徳竹 純	奈良県立国際高等学校（拠点校）
浅見 玲子	奈良県立法隆寺国際高等学校（共同実施校）
池田 靖幸、花房 拓歩、富倉 法子	奈良県立高取国際高等学校（共同実施校）
吉村 雅子、安楽 聖菜	奈良県立奈良高等学校
杉本 和歌子	奈良県立畝傍高等学校
谷垣 徹	奈良県立青翔高等学校
登山 綾乃	奈良県立奈良北高等学校
藤井 正太	奈良女子大学附属中等教育学校
黒宮 祥男	名古屋国際高等学校

(1) 第1回担当者会議（拠点校・共同実施校）

日時：令和6年4月18日（木）

場所：オンラインによる開催

内容：WWLコンソーシアム構築支援事業（グローバル人材育成強化事業）について
 今年度の取組について
 「高校生国際会議」（仮称）について
 その他

(2) 第2回担当者会議（全関係校）

日時：令和6年5月17日（金）

場所：オンラインによる開催

内容：WWLコンソーシアム構築支援事業（グローバル人材育成強化事業）について
 「高校生国際会議」（仮称）について
 その他

第2回以降は、拠点校・共同実施校の3校担当者が参加するGoogle Classroom、全関係校担当者が参加するGoogle Classroomを作成し、3校担当者では主に行事開催に関わる情報共有や協議、全関係校担当者では事業に関わるイベントや研修についての情報共有を行った。

2.3 「高校生国際会議 in NARA」実行委員会

参加者：運営校（拠点校、共同実施校）の生徒11名

運営校担当教員等

内容：「高校生国際会議 in NARA」開催に向けた企画、準備、進行打合せ等

実行委員は、運営と会議でのファシリテーターを兼ねているため、3日間の内容検討や準備に加え、議論をどう円滑に進めるかについても研修し、英語または日本語でのファシリテーター役として練習を積んだ。

- (1) 第1回実行委員会
日時：令和6年8月26日（月） 場所：奈良県立教育研究所
- (2) 第2回実行委員会
日時：令和6年9月12日（木） 場所：オンラインによる開催
- (3) 第3回実行委員会
日時：令和6年9月26日（木） 場所：オンラインによる開催
- (4) 第4回実行委員会
日時：令和6年10月10日（木） 場所：オンラインによる開催
- (5) 第5回実行委員会
日時：令和6年10月24日（木） 場所：オンラインによる開催
- (6) 第6回実行委員会
日時：令和6年11月9日（土） 場所：奈良県立教育研究所
- (7) 第7回実行委員会
日時：令和6年11月14日（木） 場所：奈良県立教育研究所
- (8) 第8回実行委員会（プレ会議）
日時：令和6年11月21日（木） 場所：オンラインによる開催
- (9) 第9回実行委員会
日時：令和6年11月30日（土） 場所：奈良県立教育研究所
- (10) 第10回実行委員会
日時：令和6年12月5日（木） 場所：オンラインによる開催
- (11) 第11回実行委員会（プレ会議）
日時：令和6年12月13日（金） 場所：オンラインによる開催
- (12) 第12回実行委員会
日時：令和6年12月19日（木） 場所：奈良県立国際高等学校

2.4 ALネットワーク運営指導委員会

氏 名	所 属 等
尾久土 正己	奈良県立大学 学長
赤沢 早人	奈良教育大学 教授
赤間 亜希	一般社団法人日本エコツーリズム協会 主任研究員
和泉 宏明	国連世界観光機関（UN Tourism）駐日事務所 企画・渉外部長

日時：令和7年3月6日（木）（予定）

場所：オンラインによる開催

内容：令和6年度の取組について

次年度の取組について

運営指導委員による指導助言

その他

3 拠点校・共同実施校の概要

3.1 拠点校の取組概要

拠点校である奈良県立国際高等学校は、「多様な人々と積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する」ことを Mission とし、令和2年4月に開校した。

Mission（本校の使命）

- 多様な人々との積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する。
- 強い探究心と主体性をもって、国際社会で新たな価値を創造していく自律した態度を育成する。
- 国際社会で求められる自他を尊重する精神と豊かな感性を育成する。
- 健やかな心身により、国際社会で活躍するための旺盛な行動力を育成する。

Admission Policy（入学者の受け入れに関する方針）

- ・ 本校の使命や育成を目指す資質・能力を理解し、教育課程全般に前向きに取り組むことができる生徒
- ・ 中学校段階で求められる基礎的な学力を身に付けている生徒
- ・ 多様な人々とのコミュニケーションに意欲的に取り組む生徒
- ・ 国際社会の平和と発展に貢献する意欲をもつ生徒

Curriculum Policy（教育課程の編成及び実施に関する方針）

- ・ ICTの活用により個別最適な学びを目指します。
- ・ 探究活動をはじめとするあらゆる教育活動で協働的な学びを推進します。
- ・ 学校設定教科「国際教養」を中心においた系統的総合的な教育課程を編成します。
- ・ 社会に開かれた教育課程の実現に向けて学校全体でカリキュラムマネジメントを徹底します。
- ・ 「世界とつながる高校。」をテーマにグローバル教育を推進します。

Graduation Policy（育成を目指す資質・能力に関する方針）

本校では、以下の6つの資質・能力の育成を目指します。

- ・ 探究力
社会の様々な課題について、探究心をもって課題を発見し、解決に導く。
- ・ 創造力
自分の考えや常識にとらわれず、創造的に考え、新たなアイデアを生み出す。
- ・ 協働力
文化や言語の違いを超えて、協力・協働しながら互いに高め合う。
- ・ 寛容さ
文化や考えの違う他者の意見や存在を、社会をよりよくしていくための重要なものとして受け入れ共に高めようとする。
- ・ 挑戦力
課題について、失敗を糧にしながら意欲的に解決に向かう。
- ・ キャリアデザイン力
希望する進路に向けて、課題を把握し、解決のために行動を起こす。

奈良県立国際高等学校 グランドデザイン

使命 MISSION



多様な人々との積極的なコミュニケーションを通して、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する。



強い探究心と主体性をもって、国際社会で新たな価値を創造していく自立した態度を育成する。



国際社会で求められる自他を尊重する精神と豊かな感性を育成する。



健やかな心身により、国際社会で活躍するための旺盛な行動力を育成する。

目標 GOAL 世界とつながる高校。



これからの社会に必要な新たな教育を創造する。



高度な学びのネットワークの拠点校としての役割を果たす。

育てたい力 GENERIC SKILLS



知識を活用し課題を解決する力

探究力



協力・協働して互いに高め合う力

協働力



試練を克服し前進する力

挑戦力



新たなアイデアを生み出す力

創造力



文化や考えの違いを大切にする力

寛容さ



進路に向けて行動を起こす力

キャリアデザイン力

学び CURRICULUM 「国際≠英語。～真の国際人を目指して～」



ICT

- ・一人一台のiPadを使用
- ・個別最適化された学習
- ・反転型学習、探究学習



学校設定教科「国際教養」を設置

グローバル探究

- ・地球規模の課題について探究活動



英語

- ・少人数・習熟度別授業
- ・プレゼンテーション指導
- ・ネイティブ教員による授業

世界の言語

- ・5つの言語・文化に触れる

将来 FUTURE



世界へ

海外大学進学



日本で

国内大学進学（理系・文系）

日本で、世界でグローバルに活躍

ルーブリック

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
探究力	生活や社会について考え、改善したほうが良いと考えていることがある	地域や社会で解決したい課題を見つけ、その原因や背景を考えることができる	地域や社会のよりよい未来に向けて、改善すべき課題を見つけ、その原因を追求して、未来のあるべき姿を考えることができる	グローバルな視点から、世界的な課題の問題点やより良い未来の理想的な姿を示し、その実行可能性について検討することができる
創造力	与えられた情報を整理することができる	地域や社会の課題について情報を集め、分析・評価しながら改善すべき点を提示できる	地域や社会の課題やその解決のための内容を批判的思考で掘り下げ、解決に向けた案を提示することができる	自己の考えに固執することなく、グローバルな視点から創造的に考え、斬新なアイデアを生み出すことができる
協働力	他者と積極的にコミュニケーションをとることができる	目標達成のために、集団の中で他者を助けたり、支援したりできる	課題解決に向け、集団の中での自己の責任を果たしながら、他者と協力して行動することができる	課題解決に向け、対話を通して、自己の主張や他者の意見を調整し、集団として士気を高めることができる
寛容さ	相手の立場や考えを気づかえる	相手の立場や考えを常に想像し、共感することができる	文化や考え等の違う相手にもあたたかく接して、他者の考えを尊重し、違いを認めることができる	自分とは違う意見や考え、経験を共有し、社会をより良くしていくための重要なものと考えることができる
挑戦力	与えられた指示に従い、自分の作業をすることができる	指示を待たず、課題を自ら発見し、取り組むことができる	課題に取り組む中で、失敗しても強い意志をもって、新たな挑戦を続けることができる	高い目標や志をもち、困難なことに向き合いながら、意欲的・積極的・継続的に取り組むことができる
キャリアデザイン力	自己の適性について考えることができる	自己の適性を理解し、進路に関する情報を自ら集めることができる	希望する進路を実現するために、自己が直面している課題を把握することができる	希望する進路を実現するための課題を的確に把握し、解決のために行動を起こすことができる

3.2 共同実施校の概要

3.2.1 法隆寺国際高等学校

共同実施校である法隆寺国際高等学校は、奈良県立斑鳩高等学校、奈良県立片桐高等学校が統合され、平成17年に開校した。全日制普通科・歴史文化科・総合英語科が設置されており、令和6年に創立20周年を迎えた。

平成22年7月には奈良県立高校として唯一のユネスコスクールとして承認され、以来全ての学科において探究活動を行い、毎年度成果発表会を開催している。

<教育方針>

本校の教育は、日本国憲法、教育基本法及び学校教育法に基づき、民主的で平和な社会の形成者として、新しい文化の創造に努めるとともに、国際社会に貢献できる、人間性豊かな有為の人材の育成を期して推進する。

<校訓>

誠実 創造 気迫 敬愛

- ・ 人間尊重の精神を基盤として、正義を愛し、誠実に、自ら学ぶ人間たれ。
- ・ 生命に対する共感と責任感に富み、創造力豊かで、自ら考える人間たれ。
- ・ 健康な身体、豊かな情操と知性を備え、気迫に満ち、自ら実践できる人間たれ。
- ・ 相互理解と敬愛の精神を培い、次代の担い手として、社会に自ら貢献できる人間たれ。

また、ユネスコの世界遺産に登録された法隆寺を有する斑鳩町にあるという特色を生かし、地域と共にある学校づくりとして、主に以下のような取組をしている。

- ・ 歴史文化科専門教科における連携
1年生における「斑鳩学」、「奈良学」や2年生における「民俗学」などにおいて、斑鳩町教育委員会の職員や近隣の寺院の僧侶などを、社会人講師として招き、指導を受ける。
- ・ 「藤ノ木古墳現地説明会」でのボランティア
斑鳩町教育委員会が行う「藤ノ木古墳石室一般公開」において、町の要請を受け、歴史文化科1年生全員が説明の補助ボランティアとして活動する。
- ・ 法隆寺見学
1年生全員が地元の世界文化遺産を知ることが目的として行う。歴史文化科1年生による法隆寺建造物の説明などを通して、本校が所在する地域の文化に対する理解と認識を深める機会とする。

3.2.2 高取国際高等学校

共同実施校である奈良県立高取国際高等学校は、「日本人の心のふるさと」と言われる地域の豊富な文化遺産に学ぶとともに、多様な国際交流や外国語学習を積極的に進め、広い国際的視野と豊かな国際感覚を備えた人間の育成を目指している。

本校の運営方針

- 自律した真の国際人を育て、地域に信頼される生徒を育成する。
- 常に理性を働かせ、異なるものの見方や考え方を認め合い、学び合い、高め合える活力あふれる生徒を育成する。

目指す生徒像

○ 5Cを実践する生徒

強い知的好奇心（Curiosity）を持ち、
創造性（Creativity）を発揮して、
果敢に挑戦（Challenge）し、
自己開発（Cultivation）に
継続（Continuation）して取り組む生徒

国際教育における重点目標

- 国際教育を通して、幅広い視野と豊かな人権感覚を育成する。
- ① 異文化コミュニケーション力を育てる活動の工夫
- ② 伝え合う力を高める言語活動の充実

本校の特色

生徒たちの可能性を広げ、個性を積極的に伸ばし、学習意欲を引き出すために、教育課程に工夫をこらし、特色ある学校づくりを目指している。

(1) 生徒の進路や興味・関心に応じ、選択履修ができる。

(2) 各学科とも大学進学を目指すとともに、各学科の特性に応じて、国際社会に必要な人間力の育成を図る。

〈普通科〉

基礎学力育成を重視し、学年進行とともに自己の特性を生かした選択科目や、学校設定科目を活用できるようにして、多様な進路希望の実現を図る。

〈国際英語科〉

英会話や翻訳通訳演習などの専門科目を通して、幅広い知性や実践的な英語力を育成する。

〈国際コミュニケーション科〉

文系科目のほか、第二外国語やあすか学を学習し、理解力や表現力を育成する。

(3) 国際交流などを通して、人と人との心の触れ合いの機会をできるだけ多く持ち、国際理解に向けての学習の喜びを実感できるように配慮している。

(4) 学校行事や部活動などを通して、たくましい体を養い、豊かな心を育成する。

4. 探究の深化

4.1 拠点校の取組

4.1.1 拠点校の教育課程

a 拠点校の教育課程の特徴

国際科単科高校として、専門教科英語に加え、学校設定教科「国際教養」に「グローバル探究」「世界の言語」、英語等で履修できる科目を教育課程に設定している。

① グローバル探究

- ・グローバル探究Ⅰ(1年次3単位必修)
クラスで、探究活動のプロセスの中で、世界や地域の課題をジブンゴトとして捉える。
- ・グローバル探究Ⅱ(2年次3単位必修)
ゼミに分かれて探究活動を開始。スタディツアーを通して、探究を深める。
- ・グローバル探究Ⅲ(3年次3単位必修)
3年間の集大成として日英で論文を作成する。

② 世界の言語

- ・世界の言語Ⅰ(1年次2単位必修)
全員が5言語(中国語、韓国語、スペイン語、フランス語、ドイツ語)各8時間と日本手話(2時間)を学ぶ。(日本初の取組)
- ・世界の言語Ⅱ(2年次2単位 必修) ネイティブ教員とのチームティーチング
1年で履修した言語の中から1つの言語を選択し、言語活動やオンライン交流を行う。
- ・世界の言語Ⅲ(3年次2単位 選択)
2年で履修した言語について、発展的にその文化的背景とともに学習する。

③ 英語

高校生国際会議で探究テーマについて英語でディスカッションできること、英語での論文が作成できることを最終目標において、少人数、習熟度別、日本人教員と教員免許卵を有するネイティブ教員が協力しながら、総合英語、ディベートディスカッション、エッセイ・ライティングなどの授業を行っている。海外進学コースでは、そのほかにEAP (English for Academic Purposes)という授業を設定している。

④ 英語で行う教科

- ・「イマージョン理数」(令和6年度)
- ・「イマージョン数学」(令和7年度より設置予定)
- ・「イマージョン環境システム(令和7年度より設置予定)」

b 学びを支える取り組み

⑤ 個人探究週間

定期考査を撤廃し、「個人探究週間」を年5回設定している。期間中の午前には「たてにつながる探究交流会」を実施し、異学年での探究の交流活動を大切にしている。午後は個々の探究を深められる時間としている

⑥ 授業外の学び

地域の公民館や自治体のご協力で、校外でのさまざまな学びの機会を得ている。

⑦ 図書館の取り組み

本校図書館はその取り組みと実績が認められ、文部科学省の「令和6年度子供の読書活動優秀実践校」に選ばれた。

4.1.2 グローバル探究I

a 全体計画

【対象】 1 年生
【時間】 木曜日 6・7 限 その他週 1 時間
【目的】 <u>地球規模の問題に関する知識を深めるとともに、探究活動の土台となる基礎力を身につける</u> ① SDGsや社会問題等に広く関心を持つとともに正しい知識を身につける ② 自己の興味や関心を見つめ直す（進路選択とも関連） ③ 実際に活動しながら探究活動のプロセスを理解する ④ フィールドワークや報告書作成、文献調査等の正しい方法を学ぶ ⑤ 「自ら問いを立てる力」を養う 1 学期：社会問題への関心を深める（重点目標：①②④） 2 学期：探究活動を経験する（③④⑤） 3 学期：本探究ファミリーメンバー及びテーマの決定（重点目標：②⑤）
【計画】 1 学期： 身近な問題から解決すべき社会課題を見つけるために、まずは地域（奈良県）が抱える問題について考え、実際の状況を確認・検討・考察を行う。その中で、今後の探究活動に必要な手法としてフィールドワークのやり方やテーマの探し方を学ぶ。 ・フィールドワーク①（5月）…グループごとに立てた問いについての实地調査 ・フィールドワーク②（5月）…奈良教育大学の教授による講演会及びフィールドワーク ・フィールドワークを受けての報告書作成・グループ発表（6月） ・SDGsキーワード学習 ・新聞ワーク 夏休み： 自分が興味や関心のある社会問題について調べ学習をしてまとめる（自主課題） 2 学期： 探究プロセスを理解・経験し、次年度の探究活動の土台となる基礎力を身につけるとともに、主体的・自律的に取り組む態度を育む（充実した本探究のために） ・探究プロセスを1周する（2学期限定トライアル探究） ・中間報告会（10月） ・成果発表会（12月） 3 学期： 本格的な探究活動を開始するにあたり、他者との意見交換や情報収集を通して自己の興味や関心を見つめ直す。 ・探究活動のファミリーメンバーとテーマの決定 ・探究テーマに関わる情報の収集及び整理（めざせ専門家）

b グローバル探究でのゼミについて

国際高校では、生徒の興味・関心に応じた効率的な指導を実施するために、ゼミ制度を導入している。各ゼミは2名の教員が担当し、生徒の興味・関心やゼミの特性に合わせ、担当教員が専門知識を活用して指導を行っている。

1期生（2023年卒業）、2期生（2024年卒業）、3期生（2025年卒業）までは、1学年5クラス編成であったため、6つのゼミを開講していた（図1）。しかし、4期生以降は国際中学校の開校に伴い、高校の1学年は3クラス編成となった。そのため、ゼミの数も3つに再編成した（図2）。1学年2クラスの国際中学校では、2年生から高校と同じ3つのゼミを開講し、中高のスムーズな接続と相互交流を促進している。

生徒は、自身の関心に近いテーマのゼミを選択する。持続可能な社会の構築を目指し、各ゼミではさまざまな分野で社会課題と向き合う。生徒は、問題を解決するために自分に何ができるのかを問いながら学びを深める。ゼミの名称は、ESDの基本的な考え方を参考にし、ゼミ同士が独立するのではなく、重なり合い、つながりを意識した柔軟なものとしている。



図1. 6つのゼミ（高校3期生まで）

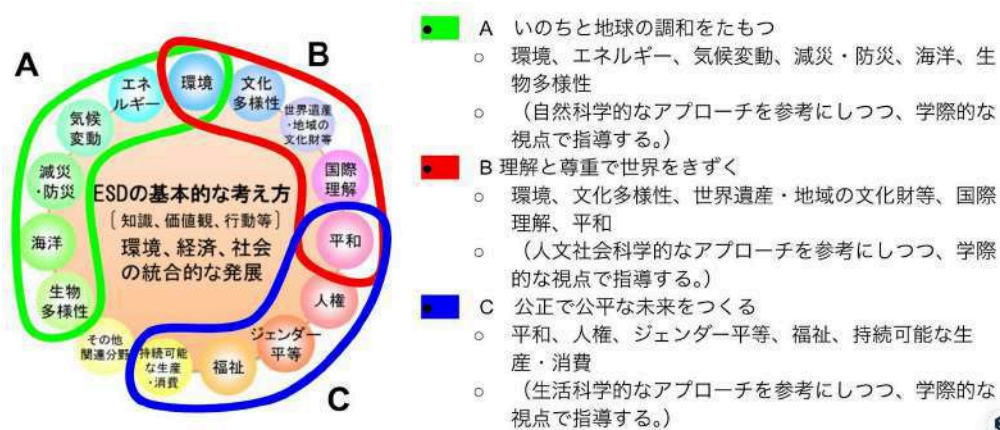


図2. 3つのゼミ（高校4期生以降、および中学校）

c トライアル探究の成果と課題

高等学校第一学年対象のグローバル探究Ⅰでは2学期に「トライアル探究」を実施した。内容は以下の通りである。

時数：計12回（各2時間）

目的：探究プロセスを理解・経験し、次年度の探究活動の土台となる基礎力を身につけるとともに、主体的・自律的に取り組む態度を育む（充実した本探究のために）

目標：探究プロセスを1周する（探究活動に実際に取り組み探究プロセスを経験する）

- ①課題の設定
- ②情報の収集
- ③整理・分析
- ④（課題解決策の）実行
- ⑤まとめ・発表
- ⑥振り返り

日程：9月12日(木)：トライアル探究のガイダンス
ファミリー分け（1ファミリー3-4名）
活動開始（以降授業内外で活動を継続）
10月探究週間：探究活動中間報告会
12月探究週間：探究活動成果発表会
大阪公立大学吉田教授による講演会

初めて探究活動の授業を担当する教員もいたため、教員間では定期的な打ち合わせの時間を持ち、以下の共通認識を持って、生徒の活動の支援を行った。

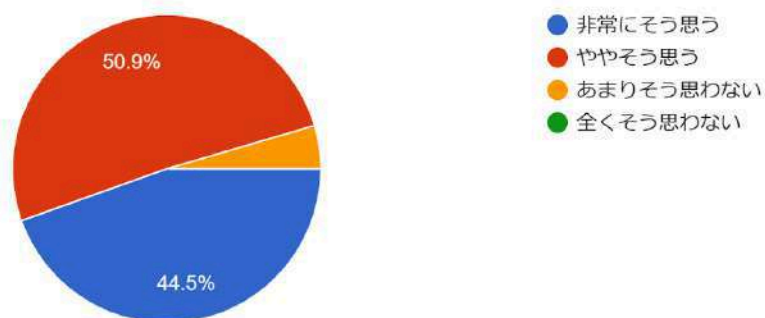
- ①探究活動＝生徒主体の学習活動
- ②教員の役割＝生徒の「自走」を促す（伴走者・サポーター）
→「進捗確認」「深い学びに向かう手助け」「共に悩む」「外部連携の補助」「安全確認」
- ③「基礎から応用へ」ではない
→最初から課題に取り組み、基礎的なスキルや知識も実践しながら身につける
- ④「調べ学習」で終わらず、（解決策の）「提案」と「実行・検証」までを行う。
- ⑤最低ラインは高くしない
→単位認定できる「最低限達成すべきこと」は低めに設定・モデルとなる生徒の育成
- ⑥2つの評価（成果）を考える
→「生徒の成果物（論文・プロジェクトの結果など）」
「生徒の成長（資質の向上や自己の変容・気づきなど）」
- ⑦探究のプロセスは単純に「順番に進む」ものではない
→・順番が前後することも
・1つのプロセスの中で複数のプロセスが同時進行することも
・探究プロセスは何度も繰り返されて、質が高まる
- ⑧活動の記録を徹底させる（収集した情報や活動内容など）

12月に全てのファミリーは活動を終え、締めくくりとして大阪公立大学吉田教授にご講演いただいた。探究活動の意義や理想的な探究活動の在り方、また生徒からの質問に答えて頂くことで、さらに理解が深まり、今後の活動の動機付けとなったと考える。

【トライアル探究事後アンケート】

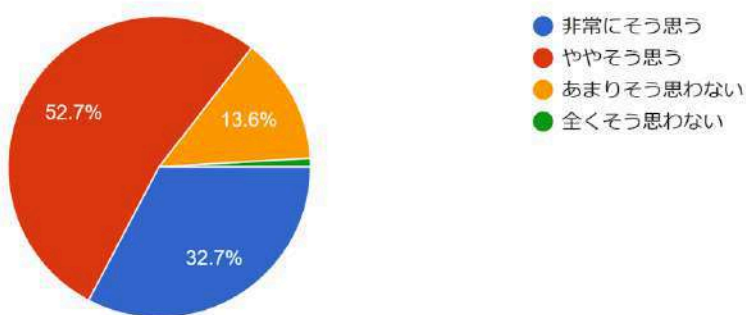
2学期の「トライアル探究」に積極的に取り組むことができましたか

110件の回答



2学期の「トライアル探究」を終え、探究活動にやりがいや面白みを感じましたか

110件の回答



d スタディーツアーへの取り組み

「韓国講座」の実施

奈良韓国教育院に協力いただき、韓国の文化や特徴についての講座を2時間実施いただいた。主な目的は、来年度韓国でのスタディーツアーに向けて韓国に対する知識、理解を深め、スタディーツアーでの学びをより自発的に取り組めるようにすることであった。来年度グローバル探究の授業においてより具体的に諸課題に取り組んでいくが、今回の講義はその前段階として韓国に対する興味関心を高めることも目的とした。

実施日：①2025年1月10日1限

②2025年1月17日1限

講師：奈良女子大学在籍の韓国人留学生

対象：高校1年生



e 情報年間計画

R6年度情報Ⅰ（1年）年間計画

月	学習内容	回	主な活動
4	オリエンテーション	2	・ ITC教室の使い方 ・ 小中学校でのパソコン授業についてのアンケート
5	情報社会における法とセキュリティ	3	・ 情報に関する法律 ・ 知的財産権 著作権 産業財産権 ・ 情報セキュリティ
6	情報のデジタル表現	4	Word入力練習 ・ 半角全角入力 ・ 表作成（時間割作成） デジタル情報の表現 ・ 2進法 ・ 16進法 ・ 2進法16進法の加減 ・ 2進法補数表現
夏休み			
9 10	プレゼンテーション	8	○ 理想の学校を考え学校案内を作成（グループ学習） ○ PowerPoint またはCanvaによる学校案内を作成（Window,iPadのどちらかで発表） ○ 発表・相互評価（発表のわかりやすさ、出来栄え、内容の良さで評価を行う） ・ 各グループで作業の分担を行うための担当者決定 ・ ブレーンストーミングで意見を集める ・ KJ法を意見をまとめる ・ 発表項目のスライドを作成する ・ 発表者、操作担当者が協力して発表を行う ・ 他グループの発表を評価する
11	画像のデジタル表現	4	ペイントの基本操作 ・ 地図の作成 ・ ポスター作製 ・ Wordとの連携
冬休み			
12	プログラミング	5	EXCELのVBAを使ってのプログラミング学習 1 変数使用について練習問題 2 IF条件文の練習問題 3 For繰り返し文の練習問題 4 演習問題

R6年度情報Ⅰ（2年）年間計画

月	学習内容	回	主な活動
4	昨年度の授業の振り返り	2	・昨年度学習した内容を確認 ・昨年度の感想等GoogleFormでアンケート
5	問題解決	3	表計算Excelの基本操作 四則演算、関数、表作成 ・VBAをのを使ってのプログラムについても学習する
6	情報のデジタル表現	4	最短経路を調べる 奈良市内の10の寺の見学をより短い時間で見学するコースを調べる。 Excel、GoogleMap、Chrome 目的：1 最短コースを見つけるアルゴリズム 2 単短時間の計算 3 寺の見学時に見ておきたい内容を調べる ・試行錯誤によって最短コースを調べる。 ・早く最短コースを見つけるための方法を調べる ・GoogleMapで距離を調べる ・Excelに距離、平均速度を入力しどれぐらいの時間が必要か計算する ・寺で見学すべき内容をChromeで調べる ・見学日程を作成する
	デジタルと情報表現	1	1年の復讐、n進数の計算・演習問題
夏休み			
9 10 11	デジタルと情報表現	12	動画作成の基礎 1 静止画からコマ送りの動画作成 2 動画、静止画、音声を入れた動画作成 3 フェードイン、フェードアウトなどのトランジョンを入れた動画作成 課題：高校生活の1日を取り上げて、60秒間の動画作成 1 企画を立てる 2 絵コンテを作る 3 必要な素材の撮影 4 編集を行う 5 相互評価を行う
冬休み			
12	プログラミング	5	HTMLをのWebページ作成

4.1.3 グローバル探究II

a. 全体計画

グローバル探究IIでは、「自ら設定した探究テーマを深め、実践し、課題解決に向けて行動をおこす」を年間の目標として取り組んできた。特に「6つの力」のうち、探究力、協働力、挑戦力を伸ばすことを重点的に行った。具体的にはグローバル探究Iで学んだ情報収集スキルや批判的思考力を自分の探究テーマに応用させること、他者との協力・学び合いを通じて互いに成長すること、また、自ら課題を設定し課題解決に向けて実践することを重点的な目標として取り組んだ。

そのために、2年生のフローとして以下を設定した。

【1学期】

- ・探究テーマの決定、ファミリー分け、探究計画書の作成
- ・スタディツアーの準備、世宗国際高校とのオンライン交流

【2学期】

- ・個人、ファミリーで探究活動、研究の目処を立てる、データの修正
- ・スタディツアーに向けて英語での報告準備

【3学期】

- ・最終データ、資料収集完了
- ・卒業論文作成に向けての準備

今年度、グローバル探究IIの授業は月曜日に行われ、祝日等の関係で授業がなくなること多かったため、計画どおりに進まない点も多々あったのが事実である。それに加え、開校以来初となる海外でのスタディツアーの準備（研修先の事前学習や世宗国際高校とのオンライン交流など）も並行して行う必要もあり、物理的な時間の確保が難しい1年となった。

しかしながら、限られた時間の中で探究計画書の作成や実践活動など多くの生徒が取り組んだ。本稿執筆時点の1月では、まだ途中経過ではあるがそれぞれの探究テーマに応じて継続的に探究活動に取り組んでいる。

b ゼミの取り組み

1 いのちと地球の調和をたもつ

概要：「美しい地球を保つために、高校生の自分達にできることはなにか」、「すべてのいのちが輝く世界を実現するために、私たちはどう生きるべきなのか」という概念を元に、日常生活や身近なところで生じている問題に着目し、それら問題の解決に向け、探究を進める。

ファミリーでの取り組み（一部）

テーマ：ゴミの分別を明確化することで、リサイクル率は向上するのか。

取り組み：ごみの分別規準は地域ごとに決まっているものの、リサイクルできるプラスチックを燃えるゴミに入れているような地域も混在する。地域により異なるゴミ分別への意識を是正し、分別を明確化する仕組みを作ること、リサイクル率の向上及び持続可能な社会の実現へ繋がるかどうか、探究している。まず現状把握のため学生向け・保護者向けにアンケートを実施し、統計データを作成した。ゴミ収集場や企業訪問をこれから行い、ゴミ処理問題について調査する。

テーマ：グリーンカーテンにより、人々の日々の生活は快適になるのか。

取り組み：グリーンカーテンを実施している団体や企業にインタビューを実施したうえで、まずは自宅にてグリーンカーテン活動に取り組んだが失敗。なぜうまくいかなかったのか、生徒たち自身で調べたり、スタディーツアーで訪問した世宗国際高校の生徒や大阪公立大学の学生からアドバイスを頂きながら、追究した。現在はコンポストの探究を行っていた先輩と連携し、コンポストを使用したグリーンカーテン活動を行うことを小さなゴールと定め、探究を進めている。

テーマ：レジ袋有料化により、プラスチック廃棄量は増えているのでは？

取り組み：「レジ袋配布を減らすことでプラスチック廃棄量を減らす」をスローガンにレジ袋の有料化は実施されたが、各自がエコバッグを使用することにより家にレジ袋がなくなり、新たなゴミ袋を購入していることが想定できる。そのような実態の中で、プラスチック廃棄量は減っていないのではないか、という仮説をもとに探究している。身近な小売店を中心に訪問し、実情把握に努めると同時に、家庭での状況調査も行っている。

テーマ： 全員が正しい知識を持つことで、外来生物についての問題は解決するのか？

取り組み：外来種や生物保全に関する正しい知識を効果的且つ効率的に発信していくための研究を行っている。外来種展示センターや動物園に訪問し、問題の実態把握に努めた。その中でも国内由来の外来生物は、外来生物に対し無知な人間が、他県や地方などから持ち帰った動物を近くの川、森に離すことで起こり得る身近な問題である為、自治体やNPO団体に対し調査を行った。現状をきちんと理解した上で、より効果的な伝達手段、ターゲットを考えていく。

生徒・教員の変容

「環境やいのち」という地球規模の大きな課題を、生徒たちの身近なところで起こっている問題に落とし込む事に注力した。「問い」を大切にし、問いや仮説の立て方、検証の仕方など探究の手法を徹底的に教えたことで、生徒たちも、最初の頃と比較すると上手に問いを立て、どのように探究を進めていくべきか理解出来ていると思う。能動的に動く生徒が増えてきたので、今後一層増えるよう努めたい。

2.理解と尊重で世界をきづく

概要：本ゼミでは様々な社会課題の解決を通して異文化間の相互理解や文化を尊重する態度を醸成することを目的としている。主として、人文科学の観点から社会問題の解決に取り組むという視点をテーマ決定において取り入れているが、社会科学や自然科学的な切り口から文化の尊重や伝統的な取り組みに関する問題に取り組んでいる生徒もいる。

年間のスケジュールは以下の通りである。

4月～5月：探究したいテーマに対しての動機、目的の明確化

＊5月初頭：フィールドワーク(大阪生野コリアンタウン)

6月～：探究に関する文献調査、フィールドワーク、アンケート調査、報告会

＊9月：スタディツアーでのプレゼンに向けての小発表会

＊10月末：スタディツアーでのプレゼン・アンケート調査

＊1月末：中間報告会(現時点での取り組みの進捗と今後の探究予定)

また、ゼミ生が抱く多様な興味関心に基づいて小グループにゼミを分割し、探究を進めさせている。グループで探究を進める生徒もいれば、一方で個人で進める生徒もいる。

ファミリーでの取り組み（一部）

テーマ：外国人児童への日本語指導について

取り組み：在日外国人児童への日本語指導がどのように行われているかや地域での取り組みを踏まえて今後どのように日本語指導を展開していくべきか探究を進めている。なお、この生徒はフィールドワークをかねて地域のNPOが主催している日本語指導の組織でボランティアを行うなど、実社会での取り組みにも積極的に参加している。

テーマ：伝統工芸品の継承・普及について

取り組み：奈良県の伝統工芸品の継承と普及について、どのようにすれば知名度や実際に手に取ってくれる人が増えるか探究を進めている。この探究に取り組んでいる生徒は、伝統工芸品について、サブカルチャーを通して親しみをもち、「誰かの大切なものをまもりたい」という意識のもとで探究を行っている。当初は日本全体の伝統工芸品の継承と普及について探究を進めていくことを考えていたが、対象地域を奈良県に限定して身近な「誰かの大切なもの」を守るための取り組みについて模索している。伝統工芸品に関する情報の普及のためにSNSを活用する、観光モデルコースを考えるなどアイデアが出ている。今後は奈良県の観光課や実際に伝統工芸品を取り扱う職人・店舗などと協働してプロジェクトを立ち上げることができないか考えているところである。

テーマ：イベントにおけるゴミ問題について

取り組み：現代社会においてゴミ問題は取り組むべき問題の一つである。その中でも、特にイベントなどで出るゴミの削減や、ポイ捨てなどの解決に取り組もうと探究を進めている。文化との関連から、現在は寺社の祭事をイベントとして見做し、ゴミの分別や減少についてこれまでどのように対処してきたのか、今後どのように変化させていくべきかについて、探究を進めている。フィールドワークの一環として、祇園祭でのゴミ回収ボランティアにも生徒は参加した。

生徒・教員の変容

年度当初から「このテーマについて探究したい」とアイデアを持っている生徒が多かった。しかし、そのアイデアと解決すべき社会問題の関連性や、問題を自分事として捉えられるかどうかで生徒は悩み、様々な学習活動を通してそれぞれが探究テーマを決定していった。また、課題を設定し、文献を読みながら協働して探究する中で、自分たちの考えを論理的に整理し、意見の根拠や理由を明確にすることを意識できるようになってきた。

教員も生徒と対話を繰り返し、生徒とともに探究テーマについて深めて考えることができた。

3 公正公平な未来をつくる

概要：平和、人権、ジェンダー平等、福祉、持続可能な生産・消費など生徒の探究テーマは多岐に渡るが、各自の探究テーマの動機付けを徹底的に考え、他人事ではなく「自分ごと」とすること、探究テーマを身近なところに落とし込むことを大切に、1年間の探究活動に取り組んだ。

ファミリーでの取り組み（一部）

テーマ：食をとおした異文化理解

取り組み：国籍や文化の違いから偏見の目で見られたり、差別を受けたりした経験からどのようにすれば、違った文化の理解を深められるか考察した。すべての人にとって欠かせない「食」をテーマに、校外で外国の食文化をテーマにした模擬店を出店し、来場したお客さんにアンケート調査などを行った。現在は校内での食を通じた異文化理解の調理実習を計画している。

テーマ：障がい者が災害時の避難所生活をより安全に快適に過ごすために私たちにできることは何か

取り組み：能登半島地震で注目された障がい者や在日外国人の避難所生活や防災の支援体制が不十分であることに着目し、自分たちにできることが考え行動に移している。実際の障がい者の方々の意見で避難所生活の中で障害を持っていない方とコミュニケーションをとることが非常に難しく、身体的にも精神的にもとてもつらかったという意見もあった。そこで5W1Hを加えた「コミュニケーションサポートボード」を作り実際に障がい者の方に意見をもらい、改良してその後支援学校や指定避難所に置いてもらうことをゴールとしている。

テーマ：子ども食堂をもっと身近に感じてもらうために

取り組み：子ども食堂の利用者、開催者に子ども食堂を利用する時や探す際に困った事などを、校内で子ども食堂の認知度、利用度、子ども食堂について思っていることなどをアンケートをとって、最終的には好きな条件を項目ごとに絞り込んで子ども食堂を検索できるウェブサイト、又は子ども食堂についてのことや地域の子ども食堂の一覧などをまとめたパンフレットを作成する。子ども食堂を知らない人に知ってもらう事から子ども食堂を探す際などで困っている人の手助けなどになれるような物を目指す。このプロジェクトで子ども食堂の利用者が増えたら、地域のコミュニティが拡大し、孤食などの子供が抱える問題も減らせる。

テーマ： カウンセリングproject ～ 学校で talk を身近に ～

取り組み：本校をはじめ、スクールカウンセリングを受けることにためらいやハードルを感じる高校生は多い。少しでもカウンセリングを身近に感じてもらうために、担当教員へのインタビューなどを通して、「予約カード」を作成し、スクールカウンセリングを受けやすい環境づくりのための取り組みをおこなう。

生徒・教員の変容

「自分ごと」と「身近なことでできること」を大切に、探究活動に取り組んだ。まだまだ途中経過ではあるが、生徒自身の意識として探究テーマを自分ごとに落とし込み、自分たちにできることを考え、実行に移そうとする態度を養成することができた。

c スタディツアー行程

日程：2024年10月29日（火）～11月1日（金）

【第1日目】

1日目は韓国へ移動後、明洞を散策した。夕食も含めて韓国の繁華街を散策し、異国の文化体験を行った。

【第2日目】

2日目は学年全体でセジョン国際高校を訪問した。交流会を行った後、ゼミ別に分かれ、本校生徒のグローバル探究についてプレゼンテーション及びディスカッションを行った。

【第3日目】

3日目はゼミ別での活動を行った。各ゼミの探究テーマに沿った施設や場所を訪問し、それぞれの探究を深めた。

【第4日目】

4日目は移動日となった。

セジョン国際高校との交流に当たっては、当日のディスカッションを深めるために、事前にオンライン交流を2回行った。事前交流と現地交流のメンバーをゼミに則って固定することで、より円滑な交流とした。ゼミ別行動日においては、事前のグローバル探究の授業でゼミ毎に行き先を相談し、旅行会社とも検討を重ねて、それぞれの探究テーマに合うように調整をした。

奈良県立国際高等学校 様 2024 アジアスタディツアーin 韓国

旅行期間 2024 年 10 月 29 日（火）～11 月 1 日（金） 教職員：10 名様(男性 6 名、女性 4 名(内 1 名校長先生)) 看護師 1 名 添乗員 3 名(男 1 女 2)

旅行方面 韓国 方面 参加人員 生徒：108 名様(3 クラス)、1 組男子 5 名/女子 28 名 2 組男子 6 名/女子 31 名 3 組男子 9 名/女子 29 名

	日程	行程	食 事	宿 泊 地
1	10/29 (火)	送迎バス(大型バス 3 台) 西大寺駅 →→→→→ 関西空港 7:15 8:45/10:50 OZ111 便 専用車 3 台※荷物車 1 台用意 仁川国際空港 →→→→→ 明洞散策 12:50/13:50 15:30/17:30 →→→« 夕食/中一会館明洞 2 号店» →→→寮 17:45/18:45 19:45	朝：－ 昼：機内食 夕：サムギョブサル	国立国際教育院様寮に宿泊
2	10/30 (水)	ホテル →→→→→ Sejong Global HS にて終日交流 9:00 11:15/15:45 →→→→→ ホテル 18:30	朝：寮 昼：世宗国際高校様の学食 夕：ホテル	
3	10/31 (木)	【いのちゼミ生徒 37 + 教員 4+TC1=42 名】 ガイド同行必須 ホテル→→→→延世大学(キャンパス内の見学&ショッピング買い物//11 時より環境についての講義) →→→(昼食/中一会館)→→→ロッテワールドアクアリウム→→→ 8:30 10:00/12:15 12:30/13:30 14:00/15:30 →→→→東大門市場散策→→→→ホテル 16:00/17:30 18:30 【公正・公平ゼミ生徒 38 +教員 3+TC1=42 名】 弊社手配ガイドよりご説明 ホテル→→→→DMZ エリア見学(臨津閣平和ゴンドラ・臨津閣・自由の橋)→→→(昼食/コンバットウル)→→→青瓦台→→→→東大門市場散策→→→→ホテル 8:30 9:30/11:30 12:00/13:00 14:00/15:00 15:45/17:00 18:00 【理解と尊重ゼミ生徒 33+教員 3+TC1+看護師 1 名=38 名】 ホテル→→→→韓服体験 in 昌徳宮→→→(昼食/中一会館)→→→国立世界文字博物館→→→→東大門市場散策→→→→ホテル 8:30 9:30/11:30 12:00/13:00 14:15/15:15 16:30/17:30 18:30 アクアリウム： バックヤードツアーで Life support system 設備、診療所の見学 専門家と Q&A 時間(15 分程度、事前質問リスト取り寄せ必要)	朝：ホテル 昼： いのち&理解 →ビビンバ 公正→スンドゥブチゲ 夕：ホテル	 ホ テ ル ベ ル ヌ イ ソ ウ ル
4	11/1 (金)	専用車 3 台※荷物車 1 台用意 ホテル →→→→→ 仁川国際空港(お買い物&各自昼食) 8:30 10:00 着 OZ114 便 関西空港 →→→→→ 西大寺駅 14:05 発 15:50/17:00 18:30	朝：ホテル 昼：空港各自 夕：－	国内送迎バス 奈良観光バスガイド 無し 3 台

■OZ=アジアナ航空 ■上記スケジュールはあくまで予定で、航空会社のダイヤ変更や現地諸事情により大幅に変更となる可能尾正もごさいます。予めご了承ください

4.1.3.d スタディツアーの成果と課題

1.いのちと地球の調和をたもつ

【現地での活動について】

①セジョン国際高校での交流

事前に交流していたメンバー同士で、プレゼンテーションおよびディスカッションを行った。本ゼミは理系に関わるテーマが基本となっており、専門用語の難易度も高かったが、事前オンライン交流と、準備したスライドを用いることで、スムーズに内容を伝えられていた。ディスカッションにおいては、本校生徒の探究テーマに共感し、韓国での現状を話してくれることでディスカッションが深まったグループもあれば、日本特有の問題であるため、韓国の生徒にとっては新しい視点でディスカッションをするグループもあった。いずれのグループも概ね有意義な時間となっていた。



写真1：セジョン国際高校でのディスカッション

②ゼミ別研修

1つ目の研修先は、延世大学にて教授より環境問題をテーマとした講義をしていただいた。世界規模の環境問題の話から始まり、韓国における現状や取り組み、課題などについてもお話をいただいた。最後の質疑応答では、日本側の視点から生徒が意見を述べ、教授の意見をいただき、知見を広げることができた。

2つ目に訪問したロッテアクアリウムでは、飼育員の方にご対応いただいた。事前に各ゼミから質問事項を送り、現地の視点から回答していただいた。本ゼミの生徒のテーマ内容には動物の殺処分について探究しているグループがあり、韓国の現状について質問していたが、韓国にはそのような問題はほぼないという回答には、生徒は驚きながら、日本での改善策について意見を聞いていた。

ホテルに戻った後には、振り返りの時間を設けた。普段は日本の視点とインターネットの情報から探究をしていたが、韓国側の視点からの意見を多く得ることができ、それらを自分たちの探究と繋げられるようまとめをした。話を聞いて終わりではなく、どのようにすればより広い視点で考えられるのかを検討し、また、教員の助言を踏まえながら、生徒各々まとめることができた。



写真2：延世大学での講義



写真3：ロッテアクアリウムでの講義



写真4：ゼミ別研修の振り返り

【成果と課題】

韓国の視点からの意見は、インターネットでは得られないものも多く、視野を広げる良い機会となった。また、セジョン国際高校では、同世代の生徒との交流を通して、考え方の違いや、また共通の考え方に触れることで、良い刺激をもらえた様子であった。課題としては、より生徒主体で行動や発言をできる機会を増やすことができたと思う。海外とのやりとりであるため、教員主導で研修を取りまとめる場面が多かったが、生徒自身がより自発的に動くことができる場面を設定できるよう、今後に繋げていきたい。

2.理解と尊重で世界をきづく

現地での活動について

①セジョン国際高校との交流について

英語もしくは韓国語を用いたプレゼンを小グループで行い、お互いに疑問点や改善点についてディスカッションを行うという形式で探究の成果を発表した。韓国の生徒ならではの視点でのアドバイスを受けることができたり、一方でセジョン国際高校の生徒のプレゼン内容に対して積極的に意見を述べることもできたりとお互いに有意義な活動になったようである。また、この時にできた関係性を基に、現在でも探究の内容についてやりとりを行っている生徒も少数ながら存在する。



②ゼミ別研修について

午前中は伝統衣装の継承や日常での活用という観点で韓服の着用体験を行い、また歴史遺産の保全という観点で（韓服を着用して）景福宮の見学を行った。日本の伝統衣装である着物と比較して、初めて着用する人であってもスムーズに着用できる、着物と比べて動きやすい、現代的にアレンジして日常でも着用できそうなど、様々な意見が生徒からは出た。また、景福宮においてはガイドさんの話を聞きながら、現在までどのように建物が保全され、活用されているのかという歴史的な背景を勉強した。また、観光地でもあることから、敷地内でのゴミ問題はどのように解決されているのかなどの調査も行うことができたようである。



午後は2023年にできたばかりの国立世界文字博物館に向かった。世界の文字や記録の歴史についての展示を通して、様々な文化や考えを理解し、互いに尊重していくためには文字や記録といったツールも重要であることを生徒は学んだ。探究を深めていくためにはもちろんフィールドワークも大切だが、文字で残された記録や先行研究に触れることも大切であ

る。また、成果物を発表するためには膨大な調査を踏まえなければいけないということも、生徒は博物館での活動を通して学んだ。

東大門でのフィールドワークでは伝統的な街区と現在の繁華街をどのように混在させていくかという市街計画を実地で体感するだけでなく、伝統工芸品の材料の販売状況や伝統食の継承の観点から市場調査を行った。



スタディツアー三日目の夜に、活動の振り返りをデータで作成した。時間が限られていたため、入力が追いつかず、各自の部屋に戻ってからデータを作成をしている生徒もいた。また、帰国後に報告書を作成しゼミ内で共有(PDF、51ページ)を行った。



成果と課題

現地高校との交流やゼミ別研修を通して生徒が得た学びは大きかった。日本の状況と他国の状況を比較することができたことも探究の進展の一翼を担っている。

一方で、課題は2点あり、一つはゼミに所属する生徒全てのテーマに直結する研修先を見つけることは非常に難しいこと、二つ目に、移動に時間が取られて研修先での活動に時間的な制約がかかってしまうことが挙げられる。ゼミ生からも、ゼミ別研修に二日間ほど欲しかった、そうすれば韓国内での比較調査もできただろう、研修先も増やすことができただろうとの意見がでていた。さらに、歴史科教員の視点から、ゼミに歴史・文化に関わる探究に取り組む生徒が多いという特性を鑑みれば、現地に向かう前に歴史的な背景をあらかじめ学習していった方が学びが深まったのではないかと考える。

3 公正公平な未来をつくる

概要：初めての韓国スタディツアーでは、人権を広く扱いゼミとして韓国でしか学ぶことができない研修先を生徒と協議し検討した。その結果、南北境界線（DMZ）と青瓦台をフィールドワーク先として決定した。

訪問先：南北境界線（DMZ）

目的：ゼミでさまざまな人権をテーマに学んだことを踏まえ、国が分断されるとはどういった人権問題を抱えているのか考え、それぞれの探究を深める機会とする

活動内容：朝鮮戦争の痕跡や南北分断の歴史について学びながら見学した。また、1期生で現在兵役中卒業生がとのお母さまで元本校韓国語講師の先生も同行いただき、朝鮮戦争の歴史、現在の状態や国民の意識など実際の歴史的建造物を見学し、説明を受けながら学んだ。現在も地雷が埋められている地上をゴンドラで見学もした。

成果（生徒感想）：日本にはない歴史を韓国で学び、一人ひとりの人権を尊重することの大切さを学んだ。

訪問先：青瓦台（大統領官邸）

目的：午前中に学んだ朝鮮半島の歴史を踏まえ、現在の政治や韓国の現代社会について学ぶ

活動内容：歴代の韓国大統領が執務を行う場所を見学し、ガイドさんの説明を聞いて、韓国の歴史や歴代大統領の政策について学んだ。

成果（生徒感想）：普段テレビで見る青瓦台を間近で見ることができて感動した。韓国の今までの大統領の足跡をすることで、国の歴史について深く学ぶことができた。



4.1.4 グローバル探究Ⅲ

a 全体計画

【対象】 3年生
【時間】 月曜7限、金曜6・7限
【目的】 1学期 - 探究のテーマを深めつつ、たてにつながる交流会に向けた準備を進める。 - 論文作成に関わる、書き方や形式を身につける。 夏休み - 探究活動の集大成としてアクションを起こし、データ収集にあたる。 - 各自論文の作成を進める。 2学期 - 論文を完成させ、他者と共有することにより探究のさらなる深化を図る。
【計画】 1学期 - たてにつながる交流会で探究の成果を発表し、下級生との交流を通じて探究の深化を図る。 - 論文のてびきを配布し、論文の形式や注意事項について確認する。 - たてにつながる探究交流会（5月15日） 3年生すべての生徒が発表を行う。 - 下級生と発表に関するテーマでディスカッションをする。 - 探究発表会（7月4日） - 各ゼミの代表生徒を選出し、発表を行う - 下級生および保護者、外部からの参加者の質疑応答を行う。 夏休み - 論文作成にあたって必要な文献を読んだり、さまざまなアクションを通じてデータの収集、分析を行う。 2学期 - 論文を完成させ、推敲を行う。 - 論文の交流を通じて、他者の視点をふまえてさらに探究を深化させる。

b. 研究テーマ一覧

3年生では、2年次より継続してゼミでの活動を行った。各ゼミで実際に生徒が設定したテーマの一部抜粋を以下に示す。

1-みんなで作る笑顔のコミュニティ

- 音楽と身体の連動性
- 廃棄される農作物の可能性～食料ロスと新たな資源活用～
- お土産を売れるようにするには...？－観光名所×お土産－
- 私たちは本当に盲導犬について理解しているのか？
- 福祉避難所～災害関連死～

2-先人の知恵を未来へ届ける

- ルッキズムの緩和
- 大和郡山市の近代都市に向けての可能性とオーバーツーリズムの解決
- 言語とコミュニケーション
- たばこによる影響
- インターネット依存

3-グローバルが生み出す力

- 食文化を通じた多文化理解
- 外国ルーツの子ども達の教育環境
- ヴィーガンの人々が過ごしやすい環境作り
- 観光しやすい奈良に
- みんなが過ごしやすい社会を目指して－災害編－

4-みんなちがうから、みんなで支え合う

- 障害者の差別や偏見をなくし、みんなが暮らしやすく働きやすい社会に
- 若年層のうつと自死の関わり
- 留学生が過ごしやすい環境
- 日本における献血の現状とこれから
- 本校の生徒におけるフェミニズムに対する意識調査

5-蒼い地球を未来につなぐ

- 海のプラスチック問題をよりよくするためには
- 自然農薬・有機堆肥の可能性
- 避難後の生活に備える
- コスメロス
- 奈良公園のゴミ問題

6-いのちの輝きを未来に伝える

- ムクドリとの共存
- オーガニック化粧品
- コンポスト
- 外来種との向き合い方
- 昆虫食について

c ゼミの取組の成果と課題

1 「みんなでつくる笑顔のコミュニティ」ゼミ 生徒： 32名

概要：防災・教育・医療・福祉・経済などの視点から、だれもが安心して毎日を送ることのできるまちづくりについて探究を進めた。

以下は、本ゼミにおいて生徒が取り組んだテーマである。

- ・食からつながるWell-Being
- ・食品ロスの削減に向けて
- ・音楽と身体の連動性
- ・廃棄される農作物の可能性～食料ロスと新たな資源活用～
- ・共生社会を作るために
- ・日常のストレスとの向き合い方
- ・理想の町づくりとは？
- ・お土産を売れるようにするには？観光名所×お土産
- ・盲導犬について
- ・福祉避難所～災害関連死～
- ・奈良のスポーツを盛り上げるために
- ・子どもの笑顔が絶えない世界
- ・運動とストレスの関わりとは？
- ・SNS利用
- ・ADHDの子どもたちに私たちができること
- ・異文化交流について
- ・「良い環境」のためには何ができるか

いずれも、生徒自身の関心に基づいて2年次にテーマ設定を行い、3年次でも継続して探究を進めた。

教室での探究にとどまらず、フードロスの啓発や、よりよいコミュニティづくりのために、校内外でイベントを開催するなどの活動を行った生徒もいた。

フードロスについて探究している生徒は、「いのちの輝きを未来に伝える」ゼミのメンバーと協力し、校内でフードドライブを3回開催した。家庭で不要となった食品を集め、フードバンク奈良に提供した。

また、プレゼン甲子園で最優秀賞を受賞した2期生のアイデアをもとに、本ゼミの生徒が校内外で「Withキッチン」を企画・開催した。

最終的な論文作成の段階において、論文の書き方や探究のまとめ方に苦労する生徒が多かった。

生徒・教員の変容

防災、医療、福祉、経済、教育などさまざまな分野で解決しなければならない問題がある中で、個々の生徒が一番興味のある問題をテーマに探究を進めた。課題解決が困難な問題に対しても、自分事としてとらえ、「高校生である自分にできること」を精一杯考え、実現に向けて努力した。

イベントを実行する中で、外部団体と協力したり、他学年の生徒を巻き込んで活動をするなど、挑戦力・協働力を発揮した場面が多く見られた。

生徒同士や教員が議論し、さまざまな立場からものごとを考えることで視野を広げることができた。また、スケジュール管理や分担決めなど、協働する方法を学び、責任と自覚を持って探究活動を進めることができたと考えられる。

2 「先人の知恵を未来へ届ける」ゼミ

生徒：22名

概要：各自設定したテーマについて3年次(グローバル探究Ⅲ)においても引き継ぎ、独自研究を通じて最終的に論文の執筆を行った。各生徒の探究テーマは以下の通りである。

・ルッキズムの緩和　・不幸な犬を救いたい！　・長時間労働　・大和郡山市の近代都市に向けての可能性とオーバーツーリズムの解決　・言語とコミュニケーション　・お菓子＝太るのイメージを変える　色覚異常の人も同じ色と見るために　・元気になろう　・たばこによる影響　・インターネット依存　・いじめ問題

以上は生徒たちの取り組んだ探究テーマであるが、いずれの探究活動も、生徒自身の興味関心を最大限に尊重して行われた。

「先人の知恵を未来へ届ける」という名を持つ本ゼミであるが、過去を生きた人々が生み出したものに価値を見出し、現在を生きる私たちにとってどのような価値があり、活用することができるのか、そしてどのようにすれば未来に繋いでいくことができるのかについて探究を深めていくというよりも、生徒たちは自信の興味関心に基づいて探究を深め、現代社会の問題について言及し、考察を深めたため、その探究テーマは多岐に渡る。

3年生では論文を執筆し、自身の探究成果についてまとめた。内容の精選や書き方・まとめ方に苦慮している姿が見られたが、最終的にその成果を形に残すことができた。

生徒・教員の変容

2年次よりテーマを継続して探究することで、より深く考察する力が身についた。

ゼミ内外での発表を定期的に行うことにより、探究内容の要点を絞って他者に伝えるために組み立てる力や個人の思考の中で留まらない多角的な視点を得ることができた。また、他者の探究内容に質問を行うことで批判的に物事を見る力が身についた。

本ゼミで扱うテーマは多岐に渡り、高校生という立場でできることを考察し実践していくことは困難な部分が多くあったが、生徒自身が興味関心を抱く内容を探究テーマとして選び、粘り強く探究活動を行うことができた。

生徒、教員ともに特定の分野に限定されることなく身近な問題に対して意識を向け、自分事として捉え直すことができた。今何をすべきなのかを生徒自ら計画立てて考え、アンケート調査を実施したり、ボランティア活動等に参加したりすることで、それぞれの仮説を実証するための行動力を身につけ、ファミリー間でもやるべきことを自主的に共有、実践する力が身についた。

3 「グローバルが生み出す力」ゼミ

グローバル探究（「グローバルが生み出す力」）は、週に合計3時間、月曜日と金曜日にありました。ゼミ内の生徒は前年度のグローバル探究と同じであり、学生たちは自ら選んだテーマに基づいて個人・グループ探究を継続することができた。1学期では、生徒たちは探究週間中にグローバル探究の「たてにつながる交流会」に参加した。1年・2年生の後輩に現時点までの探究成果を共有することが出来た。2学期には、生徒たちは現時点までの探究活動をまとめ、論文を執筆した。3学期には、高校3年間のグローバル探究の総まとめとして振り返りを行った。

探究内容一覧

タイトル	概要
服がくれる福	ファストファッションの環境・労働問題について調査し、その解決に向けて自分たちにできることを探究した。第一歩として校内での啓発活動を実施した。
食文化を通じた多文化理解	多文化社会における異文化理解の重要性に着目し、国際高校の留学生との交流を通じて世界の食文化について探究した。食を通じた異文化理解と交流の促進を探究テーマとして設定した。
ディズニー映画とポリティカルコレクトネス	ディズニー映画とポリティカルコレクトネスの関係性を探究した。ディズニーの100年の歴史における作品の成功は、時代に応じた実践に支えられており、本研究ではその影響と今後の方向性を考察した。
外国ルーツの子ども達の教育環境	外国ルーツの子どもたちの教育環境に関心を持ち、日本語学習ボランティアを通じて現状を把握した。身近な課題として高校における留学生とのコミュニケーションについて実践・探究した。
差別の認識のズレが孕む危険性	幼少期に中国で受けた差別体験から、差別の実態とその恐ろしさを多くの人に伝えたいと考えた。差別に対する個人間の認識のずれに気づき、世界における差別の認識の違いについて探究した。
教育格差について私たちにできることを考える	すべての子どもが平等に教育を受けられる世界の実現には、個人から国際社会レベルまでの多角的な取り組みが必要である。本研究では個人単位の実践から見たことを探究した。
ヴィーガンの人々が過ごしやすい環境作り	国際高校での異文化交流をきっかけに、完全菜食主義者の食生活に興味を持った。ヴィーガンの人々が奈良を訪れた際に安心して過ごせる環境づくりを目指し、ヴィーガンフードを提供する店舗のマップ制作に取り組んだ。
観光しやすい奈良に	訪日外国人が増加しているが、公共交通機関での困難が目立つ。快適な旅行環境を整える支援策として、ホームページおよびパンフレット作成を行った。
外国人にとって住みやすい日本にするには	国際高校の外国語教師やALTの体験談から、日本に来た際の困難を知り、観光客や移住者にも共通の課題があると考え、フィールドワークを通して解決策を探った。

多様性	「多様性」とは誰にとってのものかを考え直す必要があるという立場で、近年注目されるLGBTQ+に焦点を当て探究を行った。
高校生のダイエットにはどんな影響があるの？	K-POPブームの影響で、高校生に誤ったダイエット情報が広がり、心身の問題が増加している。正しい知識を広め、自分自身を愛することの大切さを考えるため本研究を行った。
児童労働	2022年時点で約1億6000万人の子供が児童労働に従事しており、その中でもパーム油生産における児童労働の問題を探究し、対策の必要性を考えた。
みんなが過ごしやすい社会を目指してー災害編ー	日本在住の外国人や観光客は、災害時に言葉の壁で正確な情報を得にくい。過去の大規模災害でも支援が届かない事例があり、今後の対策として、課題や必要な支援について探究し、コミュニケーションボードを作成した。

4 「みんなちがうからみんなで支え合う」ゼミ 生徒：35名

概要：各自設定したテーマについて3年次(グローバル探究Ⅲ)においても引き継ぎ、独自研究を通じて最終的に論文の執筆を行った。各生徒の探究テーマは以下の通りである。

・身近に潜むエイジズム ・障害者の差別や偏見をなくし、みんなが暮らしやすく働きやすい社会に ・男女差別・偏見 ・ジェンダーギャップ ・自己理解を深める ・カミングアウト ・若年層のうつと自死の関わり ・留学生が過ごしやすい環境 ・第2の家を創る ・これからの社会のMBTI ・様々な性的嗜好 ・言語と文化のつながり ・日本における献血の現状とこれから ・本校の生徒におけるフェミニズムに対する意識調査～嫌悪感や抵抗感の払拭について～ ・部活動をもっと気軽に身近に ・バーナム効果 ・日本人は人見知りで消極的って本当なのか？ ・犬の命 ・校則でメイクやヘアカラーはなぜ禁止？

いずれの探究活動も、生徒自身の関心を最大限に尊重して行われた。それぞれのファミリーや個人の考えたアプローチで課題解決に向けた取組を行い、最終的にその成果を論文に残すことができた。

生徒・教員の変容

本年度は、2年次に立てたテーマをもとにファミリーまたは単独で探究を進めた。生徒たちは、アンケートやインタビュー、文献調査を実施し、指導教員らのアドバイス等のやり取りを重ねながら、論文執筆を通して自らのテーマとその課題解決の道筋について考えを深めることができた。また、たてにつながる交流会やゼミ内発表を通じて、より理解を深めていった。ゼミ内のテーマは多方面にわたり、生徒は多様な価値観に触れることができた。

教員は論文に関して最低限の知識を必要とする。テーマが多方面にわたり、それぞれに於いての知識が必要となるにもかかわらず、論文の本数が多く、生徒との細部にわたる議論の回数が少なかったように感じる。また、他のゼミとの進捗の報告などはなかなか時間がとれず、各教員の裁量だけで授業を展開するしかない部分も大きかった。しかし、1期生、2期生の論文集などの完成したものがあったため、生徒たちも教員も方向性は示されていて進めやすいように感じた。課題解決のための実践や取り組みまで結びつく探究学習がもう少しできればよかったと感じる。

5 「蒼い地球を未来につなぐ」ゼミ

生徒：19名

概要：地球温暖化や水質汚染や地震、プラスチック問題など地球や環境に関わるテーマで各自が探究を行い、持続可能な社会の実現を目指している。各自設定したテーマについて3年次(グローバル探究Ⅲ)においても引き継ぎ、独自研究を通じて最終的に論文の執筆を行った。各生徒の探究テーマは以下の通りである。

- ・海のプラスチック問題をよりよくするためには
- ・国際高校のゴミ問題
- ・自然農薬・有機堆肥の可能性
- ・避難後の生活に備える
- ・コスメロス
- ・鹿にとってゴミは悪影響
- ・奈良公園のゴミ問題

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：海のプラスチック問題をよりよくするためには
取り組み：海洋汚染が、海洋動物のいのちを脅かしている問題を解決するために、ペットボトルの再利用をテーマとして探究を進めた。ペットボトルを利用した段ボール製のクーラーを制作し、災害時などで使用できる冷却装置の実用化を目指し活動してきた。
テーマ：国際高校のゴミ問題
取り組み：プラスチックゴミのポイ捨てによって引き起こされる生態系への影響を知り、ゴミの分別の促進に取り組んだ。ゴミ箱を作成し、人々の意識を変化させるリサイクル活動をした。
テーマ：自然農薬・有機堆肥の可能性
取り組み：化学農薬が海洋汚染の一因であることを知り、化学農薬による被害ゼロを目指すために探究を進めた。家庭で出た生ゴミで作られた有機堆肥を使用することが問題の解決に繋がるのではないかと考えた。
テーマ：避難後の生活に備える
取り組み：地震発生時の知識や防災対策についての知識はある程度はあり準備はしているが、避難生活についての知識があまりないことに気づき、防災パンフレットの作成や、防災ボトルの有用性を伝える事により避難後の生活に備える活動を行った。
テーマ：コスメロス
取り組み：コスメを使い切れない人が多く、廃棄物として環境に悪影響を与えることを知り探究を進めた。リップやチークを用いての再利用を検討し、身近なチョークの作成を行った。
テーマ：鹿にとってゴミは悪影響
取り組み：奈良公園のゴミのポイ捨てによる鹿への被害や環境への悪影響について興味をもち、現状について調べている。ポスターを作成し、外国人観光客にもわかりやすいデザインを考案した。
テーマ：奈良公園のゴミ問題

取り組み： ゴミが原因で死亡した鹿がいる現状を知り、奈良公園のゴミをどのようにすれば減らすことができるのかを探究した。鹿が誤飲しても良い紙袋の存在を知り、周囲に広める活動をしようと考案した。

生徒・教員の変容

昨年度のゼミから継続してゼミ活動を行ってきたが、各ファミリーが担当教員と何度も面談を行いながら、より良い卒業論文を仕上げるために探究を重ねた。年度当初は探究のまとめがなかなか進まず、もどかしさを感じている生徒も多いようであったが、徐々に自分なりに問題の解決に取り組んだ。探究活動を進めていく上で、教員は生徒の思考を深めるために、上手くサポートしていく必要がある。課題の原因は何なのか、数ある解決策の中からなぜその手法を選んだのかなど、質問をすることや問のまとめ方を提示することで、生徒の新たな発見や視点を導くことができると感じた場面が多くあった。グローバル探究Ⅲの日々の授業を通して、生徒が主体となる授業における教員の役割を再認識することができた。

6 「いのちの輝きを未来に伝える」ゼミ

生徒：32名

概要：さまざまないのちがともに生きる世界、そのバランスが崩れ、今、共存することが難しくなっている。すべてのいのちが輝き、それぞれの力を発揮できる世界を実現するために、私たちはどう生きるべきなのか。私たちヒトを含む多くのいのちがバランスを保ち、共に暮らせる社会を作るためのヒントを探る。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：コンポスト

取り組み：地球温暖化が問題視される現代において、ゴミ焼却で排出される二酸化炭素も大きな課題である。日々家庭から出される「生ゴミ」をなくすことでその一助となるよう「コンポスト」普及に取り組む。市役所、議員さんやボランティアの方々とタッグを組み、学校や一般家庭でコンポストを広めるべく、活動を進めている。



テーマ：奈良県で川のポイ捨てを減らそう

海のゴミが増え、海洋動物のいのちが脅かされている問題を解決するべく、海のない奈良県で海につながる川ゴミの減少に取り組んでいる。地域密着のボランティア団体「秋篠川の源流を愛し育てる会」の川岸清掃に参加しながら、川ゴミの減少に歯止めをかける新たな取り組みを模索している。今年度はポイ捨て防止の看板を設置することを目標に活動してきた。



テーマ：ムクドリとの共存

取り組み：奈良市新大宮駅周辺にムクドリの群れが集まり、ヒトのくらしとムクドリの暮らしに折り合いがつかない現状がある。奈良市役所、奈良市保健所に行政としての取り組みの聞き取りをしたり、他府県の取り組みを調べたりするなどし、互いが折り合いをつけた共生の方法を探っている。また喫緊の対策として、糞の清掃方法についても研究を行った。

テーマ：ペットのいのちを守る

取り組み：ペットが捨てられ殺処分されることが後を絶たない。自分たちにできることはないか、譲渡会などを行なっている施設を訪問し、現状を学びながら、高校生にできることを探っている。また、里親制度や去勢手術、動物保護の法律の強化についても研究を重ねてきた。

テーマ：ごはんを救おう！

取り組み：食品、特に野菜や果物の廃棄を少しでも減らすため、家庭で捨てられる果物の皮や野菜のヘタなども食べられる方法がないか、調理をするなどして試している。みかんの皮やカボチャの種を使い、オリジナルのレシピで実験にも取り組んだ。身近な食品ロスにも着目し、校内でのフードドライブを実施することで、食品ロスを減らすことの大切さを訴えてきた。

テーマ：日本食を未来に伝える

取り組み：特に地域の食べ物があまり若者（自分たちも含め）に食べられていないことを知り、未来に伝えるための方法を探っている。
テーマ：1匹でも幸せに
取り組み：宇陀市にある「うだアニマルパーク」と連携をとり、動物のいのちを子どもたちに伝える取り組みなどについて学んだり、担当者からお話を伺ったりしながら、自分たちにできることを探っている。また、動物の福祉にも着目し、WVAの「5つの自由」についても研究してきた。
テーマ：食から健康を見直そう
取り組み：「ヒトの健康」を意識し、食べ物からいのちを見直す活動をしている。文献調査を行い、日々の生活の中から自分たちにできる健康的な食生活を提案する計画をしている。
テーマ：外来種「セイタカアワダチソウ」を人の健康に活用しよう
取り組み：外来種である「セイタカアワダチソウ」が地域にも多く生息しており、活用されていることがほとんどない。しかし、奈良県内で昔からセイタカアワダチソウが入浴剤として使われていることを知った。その効能を学び、手作りの入浴剤ができないかを、実際にセイタカアワダチソウを乾燥させ、実験を行なっている。
テーマ：人のいのちを豊かに
取り組み：ヒトの暮らしが変わりゆく現代において、心が健康でない状態にある人も多い。彼らが少しでも健やかに生きることができないか、手助けになることができないかを自分なりに探り、提案できる方法を探っている。
テーマ：オーガニック化粧品
取り組み：市販の化粧品に入っている添加物は体に悪いのは明らか。肌にやさしい天然の化粧品を使うことが地球にも自分たちにもよいと分かったので、添加物を使用せずに化粧品が作れないかということをテーマに、いろいろな実験を重ねてきた。米のとぎ汁、りんご蜂蜜やゆずなど、その材料もさまざま。化粧品会社とも連携を取りながら、試作に奮闘してきた。
テーマ：化粧品が与える人体と環境の影響～化粧品×SDGs
取り組み：使わなくなった廃棄予定の食物、特に果実や野菜の皮を使って化粧品を作ってリサイクルできないかを研究してきた。着色料も使わないという制限の中、うまく粉末状にならなかったり、肌に塗るには手触りが悪すぎたりと課題は山積みであった。

生徒・教員の変容

昨年度のゼミから継続してゼミ活動を行ってきたが、各ファミリーが担当教員と何度も面談を行いながら、より良い卒業論文を仕上げるために探究を重ねた。必要に応じて外部の活動者や企業、行政などと連携を取りつつ、指導してきた。また情報収集のため、外部機関とコミュニケーションが取れているファミリーは、論文の質も高くなり、探究がより充実したものとなっている。

d 論文作成

I. 論文形式

1. はじめに ・・・研究動機
2. 序論 ・・・目的、先行研究、資料と方法
3. 本論 ・・・結果と分析・考察
4. 結論 ・・・まとめ（要約）、今後の課題
5. おわりに ・・・自分自身の変容、これからの生き方など
6. 参考文献・出典・引用

II. 各章を書かせるねらい

・「はじめに・おわりに」は、通常の論文では作成しない部分であるが、国際高校では生徒自身が探究を通じてどのように変容したか、振り返らせることを重視しているため、このような項目を設けた。また、ファミリー（グループ）協働研究を行っているゼミもあり、メンバー個々の成長を振り返らせるねらいもある。

・「序論・本論・結論」については、一般的な論文に必要なリサーチクエスションから研究方法をふまえた探究の手順に準じている。なお、国際高校における探究活動は、生徒個人がそれぞれその後のキャリアにおいても継続していくことを念頭に置いているため、「結論」部分では、今後取り組んでいく予定のことを明確に記述させた。

III. ファイル管理・提出方法について

- ・Google classroomを活用し、Google ドキュメントにより論文を作成させる。
- ・各ゼミのクラスルーム上で課題としてテンプレートを送信し、編集および提出をさせる。
- ・クラスルーム上で管理することでオンライン上で、添削や助言を行うことができる。

IV. 論文の公開について

・生徒の卒業論文については、Webページ（校内及び関係者への限定公開）で、オンラインで閲覧できるようにしている。また、冊子の卒業論文は図書館でも閲覧できる。在校生は卒業論文を探究活動の参考にし、自身の活動に利用している。

V. 成果と次年度以降への課題

[成果]

- ・全員の生徒が個人やファミリー単位での活動内容を論文としてまとめることが出来た。
- ・昨年度の反省を活かし、全体として計画的に論文作成に取り組めた。
- ・事前指導などを通して、生徒に論文の形式や決まりを学ばせることができた。

[課題]

・各ゼミで担当者が生徒の書いた論文のチェックを行っていたが、負担が非常に大きかったように思われる。個人探究ではなくグループでの探究にするなど、次年度以降の負担軽減に向けて、検討が必要である。

・生徒の基本的な文章能力の向上が必要である。最終年度に論文作成を目標とするのであれば、全ての教科を通して書く力の向上に取り組みたい。